
Shadow,Light

kuxu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Shadow / Light

【コード】

N9935Y

【作者名】

kuxu

【あらすじ】

ちよつとした未来の日本。

今この時代は電子が支配する世界であり、すべてデジタルで動いていると過言ではない。そしてある学園では、それを利用した戦闘システムがある。

主人公、五十嵐健は存在感がなく、ほとんどの人に気づかれないまま生きていた。つまり、影の存在だった。頭はいいが、戦闘授業の成績は最悪。だが、ある出来事から彼の生活が激変した。

この物語は電子形、影（黒）と光（白）のバトル学園ストーリーである。

第一章 影と光 - A shadow and light - (前書き)

始めましてkuxuです。

この小説は影と言われる主人公の物語となっています。

どうかよろしく願います。

感想もお待ちしております。

第一章 影と光 - A shadow and light -

5月のゴールデンウィークが終わった頃。電気都市、南袋町にある一つの家が一見建っていた。その家の看板には五十嵐FLWと書いてある。その後ろに少し大きな一軒家が建っていた。

朝6時半。

五十嵐と書いた表札の家の二階から高校生ぐらいの一人の少年が時間を確認してベットから起きた。少年は黒髪で、少し長いぐらいの平凡な髪形だ。顔立ちは少し女に似ているが列記とした男子だ。少年は黒縁メガネをかけた後、すぐにベットから降りた。少年の部屋は机とその上にはパソコンとかがあり、さらに回りには少し多めの本棚が本をぎっしり詰められた状態で置かれている。見た目は普通に地味な部屋だ。

少年は起きた後、一回顔を荒い、お手洗いにいった後、またその部屋に戻ってきた。そして、少年はある服に着替える。生地の色は黒だが、ところどころに赤の線が入っており、襟は白と赤い線が入っているブレザーだ。Yシャツも普通の白だ。違うところはブレザーはボタンではなくチャックである。ズボンは普通に黒だ。その格好はいかにも学校の制服だ。

少年の名は五十嵐^{いからしけん}健。この五十嵐家の長男である。

健は下に降りてリビングとくつついているキッチンへ行き、朝ごはんの準備を始めた。この家での料理はいつも彼が作っている。ただほかの家族は起きてこない。

7時20分頃。上から階段を下りる音がした。その音で健は誰が起きてきたかわかる。

「おはよう兄貴」

「おはよう、閃」

リビングのドアを開けて健の弟、五十嵐閃いがらしせんが入ってそのままテーブルの椅子に座る。閃は小学生6年で、背も歳相応の身長だ。髪はうにみたいなたげたげ頭でまるで健とは正反対を示しているみたいなものだ。健はすぐに閃の前に朝ごはんをだす。

「母さんは？」

「そろそろ起きてきますよ」

閃の質問に健はわかったようにいった。閃は「ふーん」と言った後、前に出されたご飯を食べる。そのことと同時に玄関の階段からバタバタと音が聞こえる。噂すれば陰とはよく言ったものだ。

「健ちゃん。おはよう」

リビングのドアを開けて入ってきたのは健より背の低い少女、もと健たちの母の五十嵐寧々（いがらしねね）である。背は低いが年齢は確かなものだ。

「おはようお母さん。ご飯できていますよ」

「うん。だから起きてきたの」

寧々の言葉で健はやっぱりかと思った顔をした。これはどうやら日常茶飯事らしい。寧々はすぐにテーブルの椅子に座って健が作った朝ごはんを食べだす。健も座って朝ごはんを食べる。これが、今

の五十嵐家だ。

少し時間が経ったとき、いきなり家のドアが大きくリビングに響くほどのノックをされた。健はなにも不自然と思わずに玄関に行き、ドアを開ける。そこには黒髪の少し長めのツインテール少女が倒れていた。格好は健と同じブレザーを着ており、黒と赤線のミニスカートを履いている。

「け、健ちゃん。朝ごはん。し、死にそう」

「出来ていますよ」

健は少し呆れた顔で少女に言った。

「じゃあ、おじやまします」

健の一言がうれしかったのか、それとも本気でご飯が食べたかったのかはわからないが少女はものすごい笑顔ですぐに立ち上がりリビングへ向かった。健はいまだに呆れた顔をしている。もちろんさっきの健の言葉には偽りは無い。

「ご馳走様」

少し時間が経った後、少女は両手を合わせて言った。

「で、杏はなぜに制服に着替えることが出来たのですか？」

健は呆れながら弁当の準備をしながら聞く。

少女の名は五条坂杏^{「じじいぶかあむす」}。健の昔からの幼馴染だ。家もすぐ隣だ。杏の家族が両親そろって仕事に行くために杏はよく一人でここに食べに来る。ちなみに朝倒れることは最近連続のことなのでそこには驚きはしない。だが、制服を着ていたのは初めてだ。

「ん？根性」

「根性論で着替えが出来るのですか？」

「やってみれば出来るもんだよ」

まさに未知なる答えである。まあ、実際杏に正式な答えを求めるほうも間違っている。ちなみに倒れている理由は「おなががすいたから」っと笑顔で言ってきたのでそれ以上問いかけない。

「うふふ。あんちゃんはいいつも元気ね」

「うん。私は元気だけがとりえですから」

寧々にそういわれて杏は元気良く答える。自分で言ってへこまないので彼女はいのか彼女は。

しかも、この2人は歳が離れているにもかかわらずにあだ名で呼び合っている。寧々は杏のことを「あんちゃん」っと呼び、杏は寧々のことを「ねんちゃん」っと呼び合う。

「兄貴。弁当」

そんな会話をしている間に閃が制服に着替えた後に健に弁当を頼んだ。閃の服装は健の制服の赤線の部分が黄色に変わっているだけあるがズボンには短パンになっているものである。ちなみにバックはランドセルで、これが初等部の制服だ。

実は健たちが通う学園は小中高のエスカレーター式の学園である、

だが、その分少し代わったところもある。

「はい。閃。杏也」

「うん。じゃあ行くのか」

「ええ」

閃と杏に弁当を渡したと、健と杏は家を出た。ゴールデンウィークが終わったの久しぶりの学園である。だが、楽しみにしているのは杏のみであって健はそうではなかった。

だいななでんこうがくえん
第七電洗学園。

それが健たちが通う学園の名だ。さっきも説明したとおり小中高の一環学園であり、さらには特別な授業も設けられている。この南袋町にはサードエンペラータワーというのが中心に立っている。

エンペラータワーとは今の科学の一番の発達しているもので、電子に対しての現実でも大いに活用できるように研究をしている場所だ。さらにはこの学園ではその最先端の技術を使った学園種目がある。それは後に説明しよう。ちなみにこのエンペラータワーは3個目。別のところに後2つ立っている。

健たちのクラスは1年1組。時間は少し早めだが結構来ている生徒が多い。

「おはようっ！！」

教室のドアを開けて杏が元気良く挨拶をする。それを見てほとんどの生徒が答える。

だが、みんなはすべて杏に目線を合わせている。だれも健に目線を合わせない。それどころか気づいていない感じだった。

健はすぐにその場から離れて自分の席に座った。通るとき、誰も声をかけようとはしない。まるで誰も通っていることを知らない感じだ。

これが健があまり学校を楽しみにしていない理由だ。理由はわからない。だが、ものすごく影が薄いのだ。実際、友だちは杏以外いない。それどころか杏意外と話したことは無い。

しばらく時間が経ち、チャイムとともに担任の先生が入ってきてSHRが始まる。しかし、ここでも問題点があった。

「えー相田」

「はい」

先生に出席を取られて相田といわれる少年は返事をした。

「岡本」

「はい」

先生に名を呼ばれて少女は返事をする。すでにこの時点で問題が発生した。

「先生。健ちゃんの出席」

「え、健？」

「五十嵐です」

杏に言われて先生はあわてて出席簿を良く見る。

「あ、本当だ。ごめんな五十嵐」
「いいえ」

しかし、わかっている。またどうせ明日になったら忘れられることを。健の出席番号は2番。さつきは見事に飛ばされていた。しかも、これは入学してから毎日のことだ。健が杏みたいに言っても誰も気づいてくれない感じで、もう健もそのことをわかっており、あきらめている。

3時限目に入り、この学園の特別授業の時間だ。みんな制服のまま校庭に出る。

「では、今から電子人体強化の授業を始める」

電子人体強化。それがこの学園の特別授業の名だ。この世の人間の弱体を防ぐための授業だ。

この授業の担当の先生が叫んで伝えた後、先生の後ろからいきなりドーム状のフィールドが作られた。

この場が電子人体強化に必要な場所となる。名はデジタルフィールド。人はこの中では電子化される。

電子化とは肉体を電子の鎧を着せてその場の肉体ダメージを無効にする。だが、ただすべて無効に出来るのではなく、自分の肉体の電子、【ロイト】を削ることになる。ロイトが削られることはこの中では怪我と同じだ。さらには大きなダメージを受けすぎると肉体

までのダメージを負ってしまう。もちろんここから出れば元に戻り、怪我は無くなる。しかし、ロイトは時間が経つか、特別なエネルギーの回復をしなければならぬ。さらに言えばロイドは人間の身体能力も増加させるのだ。

全員デジタルフィールドに入った後、みんな生徒手帳を手にした。

「では、全員DUSは発動しろ!!」

先生の言葉により全員生徒手帳をいきなり剣や銃に変化させた。これこそがこの授業の最大の特徴だ。DUSとはデジタルウェポンシステムの略であり、その名のとおりこの中で使える武器である。デジタルホールの電波を受けて発動の許可が得るのだDUSはパソコン、携帯に電波を発信することも可能。変化武器とかの調整とかはそれである。ほとんどの(、、、)の生徒は生徒手帳だ。

だが、ここでも健にとっては問題がある。

健も先生に言われたとおり、生徒手帳から剣を発動した。変化はした。だが、問題はここからだ。健が持っている剣は刃がなく、もち手のみだ。

ここで更なる説明をする。この学園ではこの授業での評価がある。高い順でS、A、Dまでだ。そして、健は最低ランクのDだ。

健は少し悲しそうな顔をした。そんな健を杏は心配そうに見ていた。

時間は戻り、朝。五十嵐閃は自分のクラス、6年3組の教室に入った。

「オース。閃」

「オツス」

教室に入ってきたら一人の少年がなれなれしく話しかけてきた。閃はなにも違和感かんじつに挨拶を返した。少年の名は進藤徹^{しんどうとあ}。閃の友でもある。

「ウイース。閃」

「おはよう。閃」

「おう、2人とも」

閃が自分の席に着いたとき、男子2人が閃に挨拶してきた。名は黒髪のサラサラヘヤー^{あさがしんじ}が浅賀信二^{あさかのぶじ}で、ボサボサの髪をしているのが桂木広^{かつらひろ}だ。2人とも何らかの関係で閃の友だちだ。

「お前ら、そろそろあいつが来るぞ」

徹がにやけながら言う。だが、そのことに3人は反論できない。

閃を含めた3人は今、同じ相手に恋をしているのだ。そのとき、教室のドアが開いた。

「あ、はるちゃん。おはよう」

「おはよう」

入ってきたのは水色のポニーテールの美少女だ。閃以外にもほかの男子は彼女に見とれていた。彼女の名前は白本春海^{しらいもと はるみ}。彼女こそ閃たちが恋をしている人物だ。

「さて、お前らそろそろいいか？」

徹が呆れながらいう。

「あ。ああ」

「そういえば閃。お前本当にSランクに一番近いって言われているのかよ」

「な、何でそのことを」

「徹に聞いたぜ」

「お前、また勝手に人の情報を」

徹はなぜにか情報収集が得意で、いつも隠していることがばれてしまう。

電子人体強化のランクは確かに最高はSだが、初等部はAまでが最高値で、さらには高等部ではSランクの生徒はマスターといわれて、専用のDUSが与えられる。そして、閃はなんと電子人体強化のランクがAという高ランクである。さらにはこのまま行けば中等部はS、高等部ではマスターは確実だといわれている。

「へえ〜五十嵐くん。またAランクなんだ」

閃たちの話を聞いていたのか、春海が閃たちの会話に入ってきた。そのことに閃たちは驚いていた。さらに正確に言えば緊張していたのだ。

「そうだ。閃は俺たちの誇り高き親友さ」

徹が自信満々に言った。閃は少し照れた顔になりそうになった。

春海は「へえ〜」と言って感心していた。

「私なんかまだだよ。お姉ちゃんなんてBなのに」
「姉がいるのか？」

春海の言葉に閃が聞く。

「しんせい白本春香。高等部で超モテモテの妹と同じぐらいの人気を誇っている」

「へえ。お姉ちゃんのこと知っているんだ」

春海はさらに感心する。それを見て男子3人は徹をにらむ。

「まあ、俺にかかれればこの学園の情報などたやすいことだ」

「じゃあ、俺の兄貴のことを知っているか？」

「お、お前兄なんていたのか？」

「ああ」

そう言って徹は考えながら携帯をみる。

「ない。お前の兄貴がいる事態初めて聞いた」

「だろっつな」

閃は健の影の薄さを知っている。いくら徹でもわからないのだから
うと思ったのだろうか。

「五十嵐くん。お兄さんがいるんだ」

「まあな、性格は俺とま逆だ」

健と閃。本当にこの兄弟は性格がま逆だ。

放課後。今日は委員会の集まりがある。健は図書委員だ。なので今は図書室にいる。

「となり、いいですか？」

その時、一人の少女が話しかけてきた。髪はロングの白っぽい色をしている。右前髪に桃色の髪留めをつけている。体型は中学生に間違ってそうな小ささだ。彼女の名前は春皆菜^{はるみなしおり}。健と同じクラスの女子だ。だが、彼女は誰とも話したところは見たことは無い。

「いいですよ」

「ありがとうございます。五十嵐君」

そして、健の名前を覚えている人だ。杏以外に覚えている人は彼女以外いない。

「「……………」」

だが、これ以上の会話は無い。これが健の毎日である。

影の健と、光の閃。これが一番の兄弟の違いかもしれない。

第一章 影と光 - A shadow and light - (後書き)

一様、設定としたら高校生と小学生の五十嵐兄弟が主人公です。
まあ、中心は主に健で進めますが。

もしよかったら第一章と次回の第二章は続けて読んでくださると
うれしいです。

ご感想お待ちしています。

朝、杏も家に来て朝ごはんを食べ終わって学校に行こうとして健は今日の授業に必要なものを出すために机の引き出しを開けた。そしてそこには懐かしいものが見えた。

「懐かしいですね。このお守り」

健が手にしたものは赤黒のお守りだった。このお守りは中等部に入学するときに父親にもらったものだ。

健と閃の父である五十嵐^{いからしえん}炎は今はサードエンペラタワーのコンピュータプログラマー、つまりエンペラータワーや、この町周辺のプログラムの管理をしているところでその部の部長である。そのため結構なお偉いさんだ。実際、開発技術も天下一品で何個か家に残されている。つまり今、健が持っているお守りもんなかの仕組みをされているのはずだ。だが炎は本気の家族好きでそんな家族に迷惑など一回もない。しかし、仕事の関係で月に2、3回ぐらいしか帰ってこない。

(父さんが作ったものなら、安全でしょう)

健、いや家族全体、炎のことを信頼している。そのため健はなにも不自然に感じつにお守りをポケットに入れた。

今日も電子人体強化の授業が始まった。この授業は週に4日はある。だが健にとっては楽に出来る授業だ。

「やっとこの授業だ!!」

特に勉強が嫌いなやつには人気だ。もちろんさつき叫んだ杏も勉強が大嫌いだ。だがなぜか健のことだけは覚えている。しかもあつてからのこと全部。

存在が忘れられる健にとってはどうでもいいことだ。なのでいつも座ってこの授業を見ている。

健の実力ではちゃんとした発動は出来ない。そのことをはつきり分かっている。もちろん健だって努力はした。だが、小学校の頃から忘れられていた健はしつかりとした個人レッスンを受けていない。ちなみに先生に声をかけても気づかれない。

「健ちゃん。今日もなの?」

「杏。僕のことには気にしないでください。君はこの授業を受けてください」

「健ちゃん」

「僕は、影ですから」

杏は心配そうな声を出した。

「おい。杏」

「ゆ、夕日」

その時、杏の友人の、葉柱夕日はしゅうゆいが話しかけていた。もちろん彼女も健の存在を忘れていない。髪はロングの青髪のポニーテールでなんか活発的なイメージがある。

「どうしたの一人でこんなところにいて」

「むっ、一人じゃないよ。健ちゃんもいるもん？」

「健ちゃん？」

夕日の言葉に杏は頬を怒って脹らませた。そして夕日は杏が指差すほうにゆっくりと顔を向けた。

「誰だっけ？」

「同じクラスの、よく話す私の幼馴染！！」

「あ、五十嵐のこと！？」

このとき、健は何を話していると思ったがあえてツッコまない。夕日は杏に言われて健がいるところをじっと見る。

「あ、あんたが五十嵐！？」

「どうも」

夕日はものすごく驚いた。だが、それは当たり前だ。夕日の目線ではいきなり誰もいないところにいきなり眼鏡をかけた地味な男がそこにいたのだから。

実のところ、健をしつかり見るためには意識、つまり健がそこにいることをしつかり分かっているかないと見えならしい。

「おい、お前ら集合しろ」

「はい」

先生に言われて健たちは集合場所に走った。

「今日の授業は昨日終わらなかった一人一人の診断だ。しつかり

終わらせるよ」

『はい!!』

健以外の生徒全員が返事をした。そしてこの授業が始まった。

診断とは今年のランクを決めるものだ。実は4月中でもやったのだが、5月のGWでのあるために再診断が必要となっている。ちなみにこの診断はいつも杏が先生に声をかけてもらって出来る。もちろん健は自分で声をかけてやりたいのだが、健の声は届かない。しかもそれでランクがDなのでさらに申し訳ない。

さらにしばらく時間が経ち、ほとんどの生徒が診断を終えていた。

「さて、後はいいな」

「先生。健ちゃ、五十嵐健ちゃんを忘れています」

杏は先生に言った。言い直すのはいいが、ちゃん付けは直っていないのは相変わらずだ。健は杏が先生に言いに行ったのを分かった。なのでその場から立ち上がる。だが、そこで聞きたくない言葉が聞こえる。

「五十嵐？あいつはダメで9年間Dランクだろ？そして4月もDだ。これ以上やっても代わりはしない」

「で、でも」

先生は軽く杏を払いのけた。この先生、頑固だが自分が得しないことまったくしない。

「先生。それは無いでしょう」

その時、夕日が先生に話しかけた。

「葉柱か。マスターとあろうものが何言っているか分かっているのか？」

「関係ないです。それにそれは職務放棄ですよね」

そう。夕日はマスターだ。マスターの生徒はこの状況、特に正しいことは教師は反発できない。

「分かった。五十嵐健。これから診断を始める。こっちに来て」

「もういます」

「うおっ！！」

いきなり現れた健に先生は驚いた。

「そ、それでは始める。承認する！！」

先生がそう言った瞬間、健の周りにデジタルフィールドが広がる。これで健の体は電子化した。

「では、発動してみろ」

「はい。はつど キーンキーン！！」

健が言葉を言い終わる前にいきなりデジタルフィールドの青い空間がいきなり赤い空間へと変わり、刑法が鳴り響いた。

「な、何事だ！！」

「豪元先生。緊急事態です！！」

先生が叫んだとき、スーツの男がこっちに来た。どうやらこの学

園の事務員らしい。

「今、この学園のデジタルフィールドすべてに大量のウイルス獣が大量発生しています!!」

「な、なにいい!!」

ウイルス獣。それはデジタルフィールドに危害をもたらす電子体のウイルスだ。いまだに謎が多く、どこから出現するが分からない。

「ほかのところはどうしている!?!」

「他のところなんとか教職員、Sランク以上の生徒が応戦していますが、つまりそれぐらいの」

「数がよ」

豪元が言い終わったとき、健がいるフィールドにも大量のウイルス獣が出てきた。今のウイルス獣は全員狼の形体をしている。

「くそ、外から中に入ることが出来ないのだぞ。五十嵐一回出る

!?!」

「はい」

そう言われて健はフィールドから出ようとする。だが、問題はこれだけではなかった。

バチイ!!

「出れません」

いきなり激しい電撃が健の手に来た、だが健は驚かずに冷静に今の状態を伝える。その言葉に豪元も、杏も驚いた。

「出れないとだど？」

「健ちゃん。先生、承認を取り消してください」

「そう出来るならやってている！！だが、出来ない！！」

「そんな」

これは完全なる密室状態になってしまった。はっきり言ってやばい。健は最弱のDランクの生徒。しかも一緒にいるのが健を狙っているウイルス獣。しかも数は先生やSランクの生徒が相手しているほどの数だ。

「五十嵐君」

朶も少し近い場所で健を見る。

「先生。なんとかならないのでしょうか」

「そ、そういわれてもなあ！！」

夕日もあせっている。

「ギヤアアアア！！」

そんなこと言っている間、一匹のウイルス獣が健に飛びつく。健は何とか逃げる。だが、まだ追ってくる。この狼形体のウイルス獣は手が剣のように鋭いものとなっている。

「とりあえず、時間稼ぎだ。五十嵐。最悪の場合、餌になれ！？」

その瞬間、豪元は最悪の言葉を口にした。多分狙うものがいなくなれば消える。そう思ったのだろう。

「先生。それが生徒に言う言葉ですか？」

「黙れ、忘れられる生徒が一人いたとしてもなんの問題も無い。むしろ邪魔だ!!」

「そんな」

今の豪元の言葉に杏の眼から涙が出てくる。だが健はそのことを今は正しいものだと思っている。それは自分が失って誰かが助かる。それは今時分にしか出来ないことかと。

「ダメ、健ちゃん。行かないで」

だが、杏の言葉が健を困らす。

「五十嵐、前!!」

その時、一匹のウィルス獣が健に体当たりしてきた。健はフィールドの壁にぶつかる。そしてそのまま引きずられるように座る。

「僕はどうしたら」

健がかけていた眼鏡がずれる。そしてその眼にはありえないものがあつた。

「い、五十嵐。なんだそれは？」

豪元が驚きながら聞く。

「あ、眼鏡が」

そう言っただ健は自分の目をさする。今、健の目は赤く、燃えているように赤かった。

「夕日。あれって一体」

「あれが、健ちゃんの裸眼だよ」

杏は知っているあの目のこと。

「ギヤアアアア!!」

ウイルス獣が吼えながら健に迫ってくる。そしてその鋭い爪を健に切りつけようとする。それはさっきよりも早いスピードだ。

「遅いです」

だが、健は体を余裕に後ろに下げて避ける。その行動に全員驚きながら黙ったが杏のみ、そのことに確信を持っていた。

「健ちゃん。やっぱりそっちのほうがいいよ」

健のこの赤い目は非常に異常なものである。それは、その所有者に以上の集中力をもたらすことだ。

「あの眼があるときね、健ちゃんは時間が経つほど集中するとさらに集中力が増すの。別のことに集中しちゃうと元に戻っちゃうけど、私はそのすごさを何回も見ている」

「だけど、それは避けることだけよね」

もちろん、このまま避け続けても意味が無い。だが、戦うことも出来ない。

(僕が、僕が何とかしませんと)

健は急いで何かあるかポケットを探りいれた。その瞬間集中力が元に戻ってしまった。そして背後にはウイルス獣の気配が。

しまった。

健は体ごと振り向いたが、そのままはじけ飛ばされた。そして天井にぶつかりそのまま落ちていく。痛みは感じる。その時、いきなり手に取ったお守りが転げ落ちた。

(と、父さんのお守り)

健はそのお守りを手に取るうとした。その刹那、いきなりお守りがまるで黒き炎のようになってそのまま健の両手首にまきついてきた。そして、その炎は固まり、黒と赤の線があるガントレットになった。

「これって、まさかDUS?」

健は人目で見た瞬間実感した、これはDUSだと言うことを。だが、その瞬間いきなりウイルス獣が驚いている身振りをしていると思ったが、いきなり健に飛びついてきた。健はガントレットにそつと手を乗せた。

「開放、します」

その言葉が言った瞬間、いきなり健のガントレットから影が出てきて健の手を腕を包む。そしてそれは体までに侵食してくる。二の

腕にはリングが作られて巻きついたと思っただら服の裾になっていく。そして最終的には手には赤黒のグローブになっており、ガントレットの赤い線は十字架のように手の甲や腕まで伸びていた。さらに服装は、中は確かに制服なのだが、黒と赤線のロングコートになっている。足には黒と赤線がある円盤が浮いている。

「健ちゃん？」

「五十嵐君？」

そして、健は閉じた目を開けた。その眼は怖く、獲物を狙うものの眼だった。

「健ちゃん。まさか」

そしてその瞬間、襲ってきたウイルス獣をいきなり殴り飛ばした。そしてその刹那、その場からいきなりダッシュして次々にウイルス獣の群れを次々に殴り飛ばす。その速さは異常なものだ。

頭に響いてくるように分かる。

さらにはグローブの指から赤い爪が出てきた。そして中距離にいたウイルス獣を切り裂いた。

この姿の、この力の。

「五十嵐、あれを壊して！！」

夕日の言葉により、ついにウイルス獣をここに発生させたコアが出てきた。ここからウイルス獣が出てくるのだ。

使い方が。

健は右腕からさらに大きな爪を発動した。そして思いっきりコアに向かつて腕を伸ばした。

その後は、健には記憶が無かった。

第二章 黒き鎧を纏う影・The shadow clothed in b

この話から、すべてが動き出します。これからが本当の「Shadow, Light」の物語としての始まりです。

健は保健室のベットの上で起き出した。あれから何時間経ったのだろうか。外を見れば夕方になっている。多分、今日の授業は終わっているだろう。健は横においてあるブレザー、ネクタイ。そして眼鏡を見た。今ここに眼鏡があると言うことは健は裸眼である。

実際に健は眼が悪くって眼鏡をかけているわけではない。むしろ良過ぎるほどだ。だが見えすぎて疲れるというものでもない。しかし、すべてはこの両目の赤い瞳が物語っている。

「あ、健ちゃん起きたの？」

ドアが開く音と共に杏が保健室に入ってきた。隣には夕日も一緒にいる。そのまま杏と夕日は健のベットの隣にあるちょうど二つの椅子に座った。物からあったにので前にも見に来てくれたのが分かる。相変わらずの健に対しては心配性である。

「よかった。体とか大丈夫なの？」

「大丈夫です」

「本当によかったよ」

「それですね。僕は一体どうしたのですか？」

本題に入ったとたん、杏は心配した顔になった。どうやらあの後はいいいことは無かったみたいだ。

「あれから健ちゃん、倒れちゃって私と夕日がここまで運んできたの」

「そうですか。ご迷惑をおかけしました」

健は二人に頭を下げた。女子の二人に男子を運ばせるなど本当に申し訳ないのだ。

その後、デジタルホールの暴走は止まり、一斉に消えていった。健はそのまま気絶してしまってそのことを見ていない。

「大丈夫だよ。健ちゃん軽かったし」

「本当に男子なの？女子みたいに軽かったわよ」

「そうですか」

健は無表情に答えた。確かに筋肉体質では無いのは確かなのだが、そこまで軽いと不思議だと思う。

「あと、五十嵐の眼のことは杏に聞いた」

「ごめんね。話しちゃって」

「いいですよ。別に。小さい頃なら誰だってそういうことあると思います」

そう。実は健は幼稚園の頃、この赤い瞳のせいでいじめられていた。そのため、この学園に入るときには特製の眼鏡で隠していたのだ。まあ、そんなに重くは無いので必要なときは時々眼鏡を外している。

「健ちゃん。それとその腕についているの」

「あ、これですか」

健は両手首についている黒と赤のガントレットを見る。確かにこれは気になる。

「DUSよね。なんでいきなり現れて」

「そうですね。不思議です」

「……………」

「ん？どうかしましたか？」

「いや、まったく動じないわね」

「まあ、所詮科学ですから、こついつこともありますよ。自然と一緒です」

「そ、そうなの」

「さすが健ちゃん」

健はどうやら動じない性格らしい。

「ねえ。これからどうするの？」

「僕は家に帰ります」

「じゃあ、私たちも帰りましょう」

「うん」

健はベットから降りてネクタイを締めてブレザーの袖を通す。ちなみに先生にはあらかじめ夕日が言っておいてくれたのでこのまま帰れる。

健は一人ベットの上で腕についているガントレットを見た。健は思った。これが自分にとっての初めてちゃんとした発動ができたDUSだった。しかし同時に疑問も出てくる。

なぜ、このDUSは量産のDUSが発動できない健に発動できたのか。そしてその発動後の姿もおかしかった。あのときの姿はまるで、鎧を着けている感じだった。

DUSの武器の形状はすべて手や足で扱うものだ。だが、あのときの服装までも変わっていた。グローブは別にいいのだが人の姿までも変わるのとは変だ。

(今度帰ってきたら父さんに聞きますか)

今はそれしか方法が無い。

次の日。健と杏はクラスに入っていった。今日は多分昨日の噂で持ちきりだと予想したのだが、どうやら予想通りだ。それも二つとも。

「おはよう。杏」

「おはよう夕日。それで、健ちゃんには？」

「え？五十嵐いるの？」

そう言っただけで夕日は健を探し始めた。だが残念ながら健はすつと杏の隣にいる。

「あ、いた。おはよう五十嵐」

「おはようございます」

「夕日？」

さっきまでの夕日の態度に杏は頬を膨らませながら迫ってくる。杏がこんなことになるのは健が関連しているときだ。いや実際、健本人はなにもしてはいない。

「だって気を抜いているとすぐに忘れちゃうから」

「まったく。これから気をつけてね」

「は、はい」

ちなみにこの会話のとき、健は自分の席に向かっていた。だが、そんな健を見つけて夕日がとめに入る。杏に言われて本気で忘れなようにしている。

「そういえば五十嵐の噂が、まったく無いのだけど何か知っている？」

「いや、いつもどおりです」

「うん」

健の言葉の後、杏もうなずいた。そのことに対して夕日は驚いた、健は昨日であまり動じない人間だとわかったが、杏もここまで何も感じないということは完全ある彼たちにとっては日常茶飯事なのだ。

「健ちゃんにとっては噂は半日行くか行かないかのところだもん」
「まさかの一日すらも持たないとは」

夕日は少し呆れながらいった。そのとき、杏は健の腕になにか違和感を感じた。それは機能つけていたガントレットが無かったのだ。

「健ちゃん。腕のあれは？」

「ブレザーの中です。当分は使わないと思いますので」

そうやって健はブレザーのポケットをさする。いつ使うものか分からないものは健はあまり触れたくは無い。そして、授業でも使う気は無い。

「でも、本当にみんなが忘れちゃうとはね」

「夕日も前までは忘れていたでしょ」

「うう、うう名答」

杏の指摘に夕日は申し訳ない顔をする。

「でも、本当におかしいわよねそんなこと。影が薄いどころじゃないわね。なんかの呪い？」

「人に存在を忘れられる呪いなど聞いたことありませんね」

健はなにも考えずに言った。これはただの体質。健はいつもそう自分に言い聞かせていた。それは人に当たらないようにするため。

ピポパポーン！！

『え〜一年一組、五十嵐健君、五条坂杏さん。今すぐに学園長室に着てください』

その時、いきなり健たちを呼ぶ放送が入った。

「杏。これって昨日のことじゃあ」

「おかしいですね。今のは学園長の声です」

「「なんでわかるの!?!」」

健の天然な一言はどうでもいいとして、学園長の直々のお呼び出しは無視できない。この学園は初等部、中等部、高等部に一人づつ学園長がいる。そしてその二人の学園長に指示を出せるのが高等部の学園長。つまり、この学園で一番偉い人である。

「「失礼します」」

健と杏は学園長室をノックして「どうぞ」っと声をかけられてドアを開けた。そこには長い黒髪の若く綺麗な女性、もとい、この学園の学園長の鳳凰ほうおうとま智子がそこに立っていた。

「お久しぶりです。学園長」

「こんにちは」

二人は挨拶した後、智子は健に近づき、いきなり頬をつねる。その光景を杏は驚いて見ている。

「智子さんと呼べといっているだろ、健坊」

「その呼び方は僕は嫌なのですが」

智子の言葉に健は頬をつねられながら喋る。確かにこの呼び方は嫌だ。

「あんたね。こんな美人に名前では呼ばせてあげてるんだよ」

「いや、関係ありませんよ」

健はつねられた頬をさすりながら言い返す。だが、口調は相変わらず冷静だ。そんな光景を見た杏は驚きで一言も声が出ない。

「け、健ちゃん。が、学園長とはお知り合い？」

「知り合いといえますか、母さんの先輩です」

「ねんちゃんの!？」

確かに驚く、いままで健はそんなことは言わなかった。智子は笑いながらその光景を見ている。愉快な人だ。

「それで、昨日のことで呼び出したのですよね」

「本当に頭がよくって面白くないわね」

「先生がそれを言っていていいのですか？」

智子の言葉に健は冷静にツッコむ。杏はすこし思った。こんなにツッコむ健は久しぶりだと。まあ、よく杏もツッコまれているが。

「あなたの昨日のDUSよ。てか、分かっているでしょ」

「やはりお、その話ですか」

「学園長。このことに何か知って」知っているわけ無いじゃん

「……………」

期待した杏の言葉に智子は一瞬で砕けさせた。しかし、早い回答である。

「でも、分かっていることは一つあるわよ。それはね、健坊のD

USは初の鎧型のものだということよ」

「やはり、そうでしたか」

健もそのことをよく分かっている。

「そこでね、五十嵐健。あなたを私公認のマスターに任命するわ」

「何ですかそれは」

智子の言葉に健は速攻で聞き返した。確かに意味がよくわからない。

「まあ、これからランクはDではなく、マスターとしていけばいいのよ。でもそこで私の公認ということなので全校生徒に知らず気は無いわ」

「その代わり、なにかをあなたのために何かをしるという話ですね」

「……ばれたか」

智子の言葉に健はため息をはく。確かにこう考えてみればへんなことである。だがこの条件は健にとってはいいいことではないが、彼女の願いは断れない理由も健にはある。

「わかりました」

「じゃあ早速」

そう言って智子は近くにある資料の山に手を入れる。いきなりで早すぎる。

「いきなりですか？」

「大丈夫。無茶振りはないから。とりあえずは最近変な電波を感じるのよ。あなたのそのポケットに入っているガントレットと同じ電波をね」

「これと同じのが」

健はポケットをそつと触る。まさか、これと同じものが存在するのか、またはおなじ種類のものが。それは健にとっても都合がいいことだ。

「わかりました。僕が探します。失礼します」

「ちよつと待って。これもって行って」

そう言っつて智子は健に小さいカメラ型の機械を渡した。

「これは？」

「それを見て見つけておいで」

どうやらこれはその電波を受け取るための機械のようだ。

「じゃあ、お願いね」

健は一礼してから学園長室を出る。杏もあわて健に近づく。顔は完全にかにがなにやらわかつてはいない顔だった。

「健ちゃん。今の会話って、学園長は電波がわかるの？」

「わかるというよりも、見えるのですよね」

智子はこの学園で数少ない電波を見ることが出来る人だ。いま、この時代はたくさん電波がある。その電波を見えるものは特別中の特別。あの若さで学園長になれたのもこれが原因である。

DUSの電波とは、一つ一つ違うものである。それは使用していかなくても発信している。だが、その電波を利用して武器の修理やロイトの回復や修理を行えるのだ。やはり、そのときその目は本気で役にたつ。

「はやり、すごいんだね。学園長って。でもそんな人と知り合いなんだ」

「いや、実際杏も会ってますよ。一度ですが」

「え！？本当？」

本気で健のことではない限り記憶力が無い杏であった。さっきの会話で何かわかったか心配である。勉強が本当に残念な杏であった。

「あ、五十嵐君」

教室に戻ってきたとき、栞が健に近づいてきた。

「春皆さん。どうかしましたか？」

「これです」

そう言って栞は一枚の紙を渡した。よく見てみると図書委員に配られるプリントだった。昨日実は委員会があったのだが、健は気絶で欠席になってしまった。栞はそのプリントを持ってきてくれたのだ。

「ありがとうございます」

「はい」

そう言って栞は自分の席に向かう。

「健ちゃん。今のって春皆さんだよな」

「ええ。図書委員のことですよ」

そう言って健は自分の席に着く。その時、健は智子からもらった機械の反応に気づいてはいなかった。

次の日。今日から学園長である智子から頼まれた仕事を開始する。

今回の仕事は智子に渡されたこの電波感知器に反応した生徒の名前、学籍を調べて伝えることだ。この機械の使い方は簡単でDUSが勝手に発信している電波はまるで人から出たみたいになって分かりやすい。それを利用し、智子から教えられた色、黒に近い赤と言う色を探せばいい。だが、この機械の形はカメラそのものでなんか盗撮しているみたいだ。だが、健の影の無さは異状であるためにめったに気づかれない。

健は今自分のクラスの窓から登校してくる生徒を探知機を使って早速探している。ちなみに健の席は窓側なので邪魔にもならない。しかももちろんのごとく、気づかれてはいない。

(やはり、利用されていますね)

健は完全にわかっていた。この影の無さを利用していることを。だが、今の自分にはそれがお似合いだと分かっているので悔しさは無い。

「なにやってるの」

その時、後ろからいきなり声をかけられた。振り向いてみるとそこには夕日がいた。健は急いでカメラを隠す。ちなみにこのカメラのことはばれてはいけないと約束している。実際、健は学園長と知り合いとも教えないでいる気だ。

「さっきのって、電波を感知するカメラ」

(なんかバレています!?)

健は心の中でツツコンだ。だが、すぐにその犯人は分かっている。

「杏からですか」

「もちろん」

「どこからどこまで聞きましたか?」

健は思った。完全に全部話したのだろうと。

「たぶん、今あんたが思っている全部よ」

「やはりですか」

やはり、長年幼馴染をしているとそういうことが分かる。だからこそこのことを止められなかったのは悔しい。てか、こんなことは始めてであるからして健はそのことを考えてはいなかった。

「手伝おうか?」

「気持ちだけでうれいいます。これは僕自身の問題ですから」

「同類探しが?」

「問題自体が分からない問題です」

「それってループ決定じゃん」

健の言葉に夕日がツツコム。だが、それは健にとっては真面目なことである。今の健にとっては何も目的が無いと言ってもいい。お人よしの健にとっては人の役に立ちたい。多分、今回のことだっていつかは人の役に立てるはずである。そう思いたいのだ。

夕日と話をしながら健は窓を使って探す。

「でも、そんなに早く見つかるもんじゃないでしょ。この学園の生徒何人いると思ってるのよ」

「見つかりました」

「え！！」

確かにこの学園は小中高一貫の学園である。そのためにそういうのは一切見つからないはずなのだが、健はすぐに見つけてしまった。

「だれだれ？」

「あの小さい女の子です。あの制服とランドセルは初等部の子です」

健が指を指したのは茶色のパーマが少しかかっている髪で、長さは肩よりも少し長いぐらいである。

「お姫様みたいな髪ね」

「小学生なら話は早いですね」

そう言って健は席を立って廊下に向う。夕日もついてくる気であるが、そのことに今は講義している暇は無い。

と、その時、健はいきなり教室に入ってきた栞とぶつかりそうになる。

「い、五十嵐君」

「う、うめんなさい」

そう謝ってから廊下にでる。その時、偶然だが探知機を見たその

ときだった。

「これって」

「どうしたの？」

いきなり止まった健に夕日は近づく。

「夕日。もう一人いました。同じ電波を持つものが。ものすごく偶然ですが」

「まさか」

「ええ。それは春皆さんです」

しかし、これでは同じ電波を持っているものが3人いることになる。これは智子も予想していたことなのか。

「てか、そんな事実サラッと合わないでしょ」

「学園長のところに行ってきます」

そう言って健は教室を出て行った。健は小学生の女の子は今捕まらないと分かっていた。理由は二つ。一つは姉か兄に会いに来たこと。もう一つは学園長に会いに行った。これ以外に理由は無いはずである。

健は学園長室に来た。一回ノックして智子の声が聞こえてドアを開けて入ってきた。そしてそこには智子以外にさつき校門を通った小学生の女の子がいた。

「健坊。その様子だと見つかったようね。ええ、それはいいので

すがこの子は？」

「この子は偶然私が昨日見つけたのよ」

「理解しました」

「まあ、とりあえずは座って」

そういわれて健は女の子の目の前のソファに座る。健を見たとき、女の子は眼を避けた。これは前から分かっていたことだが、どうやら単純計算で5歳年下には健ははつきり見えるらしい。もちろんその理由もまったく分かっていない。

「で、まずは健坊の話を知ろうかしら」

「ええ。反応したのは僕と同じクラスの春皆菜さんです」

「同じクラス。だからこんな早く。分かったわ。じゃあ次は私の話ね」

智子はなにも考えた痕跡を残さずに次の話題に入った。この切り替えのよさが学園長になれたことにもつながる。

「彼女は日高陽菜ちゃん。この子も健坊と同じ電波を感じるのにそれ以外には代わったことは無いの。もし、健坊みたいな不思議な発動が出来るかもしれない」

「それってつまり」

「うん。あんたはこの子が発動できるまで世話をしてほしいの放課後でいいから。どうせ暇でしょ」

「そういうことですか。ですが、僕はなにが出来るかわかりませんし、もう一回あの発動が出来ることすらわかりません」

確かに健は偶然あの発動が出来ただけで、さらにはまた同じ発動が出来る保障も無い。そんな何も分からない状態で世話役と言われるのも困る。

「まあ、とりあえずは考えてみてよ。ほら、一回挨拶をして」

そう言っつて智子は健の後ろに回りこみ、背中を押して陽菜に近づける。陽菜は驚きで少し後ろに下がる。

「ほら、挨拶!」

「い、五十嵐健です。よろしくです」

「ひ、日高陽菜です。こちらこそ」

共に一回礼をしたとき、チャイムが鳴り出す。これはHRの予鈴のチャイムだ。

「じゃあ、私は陽菜ちゃんを送るわ。ちゃんと考えろよ」

「ええ。一樣は」

そう言っつて智子と陽菜は学園長室をでる。そして続けて健もここから去って教室に向う。考えることは考える。だが、答えは多分同じだ。

今日は電子人体強化の授業がある。相変わらず健は遠いところから授業を眺める。話は聞いているが、実戦は出来ない。もしかしたら健がDなのも実戦が足りないせいとも言われている。

「今日は7組の2人が手合わせをしてくれるそうだ。戦うメンバーはクジで同じく2人選ぶ」

豪元が叫ぶ中、7組の2人はなにやら面倒くさそうな顔をしてい

る。

「さつさと決めてよね。ザコ相手だと許さないわよ」

「無駄無駄。所詮庶民の1組だからな」

この学園では1〜9組までは一般人のクラスとなっており、10、11組はなんとセレブやお偉いさんの子が出席しているクラスでランクは全員A以上なのだ。

2人がそう言ってくるとき、1組の生徒はほとんどイライラしていた。さすがに今の言葉はむかつく。

「決まったぞ。代表は春皆栞と五十嵐健」

その言葉に健は反応した。さすがにクジまでは消ええることは出来ない。だが、クラスの中では「五十嵐ってだれだっけ」と言う言葉も聞こえる。

「健ちゃん。がんばって」

「クジは当たるんだな」

杏は手を振って応援し、夕日は閉まっている。

健と栞は真ん中に集まって10組の2人と対峙する。

「あんたらね。なんか静かなことで」

長い金髪の女のほつが東条由美子。

「違うね。驚きと緊張で喋れないのさ」

同じく金髪の短髪の男は金平智弘^{かねだいらともひろ}。同じ金髪でなんかややこしい。

「では、承認する!!」

豪元の言葉により、デジタルフィールドが広がる。中には壁がいくつがあるものだ。戦闘のルールは簡単でフィールドの外にはHPゲージが表示される。身体が攻撃されてこのゲージが0になったら負けの分かりやすいものだ。

「行くわよ。発動!!」

そう言っつて東条は指輪のDUSを発動する。形は先が長い二丁拳銃だ。

「俺も発動!!」

金平はプレスレットのDUSを発動し、レイピアに変化させた。どうやら接近と言っつよりもこのコンビは遠中距離らしい。

たいしてこちらはただのノーマル。しかも健はDだ。健の生徒手帳からは持ち手のみの剣が出てきた。これでは戦えない。栞は銃を発動したようだ。

「そんなので何が出来るの!!」

東条はそう言っつて拳銃を撃ちまくる。健はとりあえず逃げるて壁の後ろに隠れる。栞も隠れて銃を撃つ。健も銃を発動しようとしたがまた持ち手のみだ。

「ほら、出ておいで!」

そう言って金平は思いっきり壁をレイピアで刺したその瞬間、槍みたいな攻撃は延びて壁を一気に破壊する。健は瞬間的に走って逃げる。

(壁を破壊できる中距離型の武器と技ですか)

今の健に出来るのは逃げることに観察のみ。だが、今観察など意味が無い。栞は東条と打ち合いをしている。これは完全に男女分かれての戦いになってしまった。だが、栞のランクはC。勝てるはずは無い。

「でも、僕が一体何が」

「やっぱり凡人はザコだな。俺たちには勝てはしないのさ!」

その言葉は完全にむかつく口調だ。だが、そんなことでは健の冷静はとぎれない。

「お前はものすごくザコそうだからな。先にあの女で遊ぶのもいいな」

「見てるようだ、そいつ戦えないみたいだけど」

その言葉に健は反応した。

(僕のせいで、春皆さんが、危ない目)

健はそう思いながらポケットから例のガントレットをだす。

「健ちゃん。使えるの?」

杏の心配の中、健はそのガントレットを手首にはめた。

「やらないより、やってみる。いつもやってみたことですよね」

健はそう言ってメガネを取る。その眼から赤い瞳を東条と金平を見る。そしてある言葉を言う。

「開放します」

その瞬間、ガントレットから黒い影が健を包む。そして、あのときの姿になっていく。だが、ここにいるほとんどの人が忘れている姿である。

「な、何だよそれは」

「く、黒い鎧？」

「僕が、相手です」

そう言って健は2人に近づく。2人とも目標を健に変えて構える。

「こいつ、なに？」

そう言って東条は銃を放つ。健は腕を使ってガードする。だが、それでもHPは減る。そして、健の頭上からは金平がレイピアを構えていた。

「このやろっ!」

そして思いつきり衝撃波を放つ。前の銃が邪魔をして避けることはできない。健は対抗するように左拳を上げて衝撃を破壊しようと

している。だが、そんなに簡単にはいかない。

その間、東条は健に近づいてきた。そしてさっきよりも威力が高い射撃を健に近い距離ではなってきた。健は避けれず、そのまま吹っ飛んでしまった。その吹っ飛んだ先には金平がレイピアを構えていた。

「これで終わりだ!!」

金平のレイピアから強い電波を肌で感じる。そして金平は思いつきりレイピアを着いてきた。そしてその衝撃はトラの形をして健を飲み込んだ。

「【虎波突撃刃】!!」

健はそのまま壁にぶつかった。健のHPゲージが見る見る減っていく。

「健ちゃん!!」

「いきなりだったがこれで終わりだ」

心配している杏に対して金平と東条は余裕な表情をしている。だが、健のHPゲージはギリギリ残った。

「な、残っただと!?!」

「私たちのあの攻撃を!?!」

二人が驚いている中、ぼろぼろの姿の健が立ち上がった。

「い、五十嵐君」

「大丈夫ですよ」

そう言って健は自分の両拳を合わせた。

「さあ、行きます」

健は指先から赤い爪を出した。ただの拳では勝てないと考えたのだろう。だが、一番の問題は戦力である。

栞は驚きでその場に動くことが出来ない。しかし、栞が動けたとして健は戦わせることはさせない。彼の中には理由は無い。だが、それは健がお人よしと言うことであるのは変わりはない。

「残ったからって馬鹿にしないでくれる？」

「お前は俺たちには勝てないのは決定だからな！！」

そう言つて東条は銃を連射してくる。健は爪で何とか防いでいる。だがさつきと同じパターンでその場から金平の姿は無い。健はそのことにすぐに反応して後ろに現れた金平のレイピアを爪で受け止めた。

「なるほど、同じ手はくわないか。だが、それはあまあまだ」

その隙に東条は銃を構えた。長いためのタメなので強力な攻撃がくるとすぐに分かった。健はすぐにその場から離れようとした。

「させるかよ」

そう言つて金平はレイピアを地面に突き刺した。その瞬間、健の周りから刃が彼を閉じ込めるように地面から出てきた。

「もちろん、上からの移動もさせないぜ」

やばいです!!

東条が引き金を引く瞬間、健の目線に誰かが現れた。そして東条の射撃を健の代わりに食らった。その人物とはもう彼女以外いない。

「は、春皆さん」

健はすぐに栞のそばに来た。今の攻撃は相当のものだったらしくHPゲージがほとんど減ってしまった。だが健はそれ以上に彼女を傷つけてしまったことに対して悔いている。

「い、五十嵐君。私も戦います。なので大丈夫です」

「春皆さん」

その時、栞の髪留めがいきなり光りだした。そして栞の元から離れて円形の形となり栞の手元にでてきた。

「これってまさか」

「DUSですか」

そう悩んでいたとき、東条の射撃がこっちに来た。健は栞を抱えながら横に避けた。どうやら相談させてくれる時間はくれそうにも無い。

「傷は大丈夫ですか？」

健が壁に隠れたとき、栞がそんなことを言ってきた。彼女も健のことが心配なのだ。それは健も同じ気持ちだ。

(さて、ここからどうしますか)

多分、いや絶対に榎が手に持っている円盤はDUSだ。だが謎が多すぎる。彼女はマスターではない。なのにこんな発動が出来る。それは多分、健と同じ現象だ。健のDUSもまったく理解していない状態である。

「このままでは埒が明きませんね」

健は覚えている。金平の力はこの壁を破壊できる。つまり、この状態はただの気休めにもならない。

健は壁からいきなり出てきた。その行動は隣にいた榎も驚いている。

「お、どうやら幸福したようだね。やはり俺ら貴族にお前らザコの凡人には適わないのさ」

「ふざけないでください」

金平の言葉を健は力強くふさいだ。その言葉はいままでの健には無い言葉だった。金平は無口なやつだと思っていたのか、こんなこと言われて驚いていた。

「確かにあなた方と僕たち1組の身分は違うと思います。ですが、それは決して強さには関係ないことです。それ何に、何も見ないで勝手に決め付けしないでください」

最後の一言は健は一番怒りがこもっていた。

今まで忘れられていた存在の健。だが決して彼はずっと独りでいようとは思わなかった。むしろ分かち合える仲間がほしいと思って

いた。出なければ杏のことを大切な幼馴染とは思っていないだろう。さっきまでの行動だって稜を守るためだ。彼は結局どうしようにもないお人よしなのだ。

「お前、今の言葉は許せねえぞ!!」

その言葉に怒りが頂上まで来たのか、金平はレイピアを強く握って健に迫ってきた。この速さはいつもより早い。

「お前は今ここで俺に負けるんだよ!!」

その瞬間、健は体を静かに横にそらした。そして、そのまま金平は勢い余って壁に激突した。

「よ、避けただと」

「あなたの今の動き、僕はしっかりと見えます」

その言葉により金平は驚いた顔をする。

健の能力、それは時間が経つことに集中力が増す完全集中だ。健が発動してからさっきからずいぶん時間が経つ。それを考慮すれば今の動きは健には見えるほど集中しているのだ。

「貴様、絶対に許さん!!」

「手伝うわ!!」

そう言って東条は上に向かって銃を連射した。同時に金平は地面にレイピアを刺した。この状態ですでに上と下からの攻撃が来ることが分かる。

「【晴れ雨】!!!」

「【地獄からの爪】!!!」

上からは無数の銃弾。そして下と横には爪。これでは逃げる場所が無い。これに当たってしまったら健のHPは0になるだろう。

「健ちゃん!!!」

杏の言葉と共に、健のいた場所から煙があふれ出してきた。これでは無事なのかが分からない。だが、今の攻撃は避けられないだろう。誰もがそう思ったときだった。

「ねえ杏。五十嵐のHPがまだ残っているわよ。それどころかさっきの攻撃では減ってないわよ」

夕日の言葉を聞いた杏は急いで健がいた場所に振り向く。同時にその場の煙が晴れてきた。

「な、なんだこれは?」

「なによこれ?」

なんと健の周りには光の球が健を包み込んでいた。これには誰もが驚いた。

「これは?」

健がそつつぶやいたとき、何かの電波を感じた。しかもさっきものすごく近くにいたときと同じのだ。

「まさか、春皆さん?」

そして健は隠れていたはずの壁から出ている栞を見つけた。

「春皆さん？」

「五十嵐君。私も戦います」

栞がそう言ったとき、健の体の傷がいきなり治り始めた。そして同時にHPゲージもどんどん上がっている。

「な、なによあれ？」

「HPが回復しているだ？」

HPの回復。それは今までに無いことだった。全員驚きで声が出ない。だが、東条は反応が早く、すぐに栞に銃を向けた。

「この女が犯人ね。すぐに終わらすわよ」

「そうはさせません」

その瞬間、東条の後ろには健が現れた。

「き、貴様」

「早い！！」

東条は無茶振りに健に向かって銃を撃つ。だが、今の健にそんな弾があたるわけが無い。健はすぐに拳を握り東条に向かって振り向いた。だが東条の前には金平がいきなり割り込んできてそのままレイピアを健に向かって突いてきた。

拳とレイピアがぶつかろうとした瞬間だった。

キーンコーン。

授業終了のチャイムが鳴り、いきなりデジタルフィールドが消えた。

「授業終了だ。全員教室に戻れ!!」

この勝負、どうやら引き分けのようだ。健は安心したように肩から息を吐く。その時、杏がいきなり健に抱きついてきた。

「健ちゃん!!」

「あ、杏」

しかもその抱きついてきた勢いはすごいもので完璧に体当たりと言えるだろう。

「い、痛いです、杏」

「ほら、杏はなれて」

そう言って夕日が杏を健から切り離してくれた。健は安心したように柔のほうに顔を向ける。柔もなんて言えば迷っている状態だ。

「春皆さん。今のは自分でなんなのかわかりますか?」

「わ、分かりません」

健の質問に柔は首を横に振る。健はやはりかと言う顔をした。これは確実に彼女に相談しに行ったほうがいいのだろう。

昼休み。健は栞を連れて学園長室のドアの前に来た。

初めて学園長室に来た栞はすくそいそわそわしている。なぜなら今から学園長に会うのだからそりゃ緊張しているはずだ。

「失礼します」

健は一回ノックして学園長室に入った。智子は学園長らしく椅子に座って仕事をしていた。栞は中に入ってから一礼をした。

「つれてきました。彼女がその人です」

「は、春皆栞です」

「ちゃんと話は聞いているわよ。とりあえずは2人も座って頂戴」

そう言われて2人は隣同士でソファに座った。栞はいまだに緊張しているらしい。智子はお気楽に向かいのソファに座る。

「自発動もちゃんとできたみたいね。健坊」

「ええ。とりあえずは。それよりも」

「分かっているわ。春皆ちゃんのことでしょ。ねえ、変化したものを私に見せてくれるかな？」

「は、はい」

智子に言われて栞は自分の右前髪につけている丸い髪飾りを取って智子に渡した。栞は発動してから中の模様が替わっている。

「これが待機状態ね。そして発動状態は円盤。これも今までに無いものね」

この学園で渡される、いや、今存在しているDUSはすべて武器（剣や銃などなど）になるものであり、健の鎧、栞の円盤は始めてのことだ。

「まあ、これで春皆ちゃんにもマスターになってもらう必要があるわね」

「は、はい」

「それで、健坊は陽菜ちゃんの世話役してくれるの」

「それは、彼女が了承してくれているのですか？」

智子の言葉に健は自分のことよりも陽菜の心配をしようとしてきた。健にとって、影の自分は後回しでいいのだ。とりあえず、陽菜を無理させるわけには行かない。それも小学生なのに。

「彼女は無言でうなずいてくれたわ。後は、あなたしだいよ健坊」
「分かりました。日高さんのことも受けます」

「じゃあ今日の放課後からお願いね。連絡はこつちから入れるわ」

「ありがとうございます。春皆さん、行きますよ」

「は、はい」

健に言われて栞は立ち上がった。たぶんだが、彼女は初めてまともに健の言葉を聴いたのだろう。少し手間取った様子がある。

「あ、春皆ちゃん。ちゃっといい？」

「は、はい」

「もしよかったら、健坊のそばにこれからいてあげて、あなたの力はきつと必要になるから。いいわね、健坊」

「僕よりも、春皆さんのほうが先ですよね」

そういわれてわざとらしく智子は笑った。

「わ、分かりました。わ、私でよければ」

「では、お願いします。僕もあなたがいてくれたら助かります」

健は微笑みながら言った。その言葉に偽りは無い。栞は少し顔を赤くした。

「それじゃあ、後は若い者同士お願いね」

智子はニヤニヤしながら2人を見送った。健はそのニヤニヤの意味がまったく分かっていなかった。

そういうことで今日の放課後。

智子に言われて健と栞は共に初等部の教室に来ていた。智子が言うには一回、彼女の普段の様子を見ておいたほうがいいと言われたのだ。

この時間は授業は行っていないが掃除やHRが行われているはずだ。確か彼女のクラスは2組である。そのために一旦、健の弟の閃がいるクラスを通らなければならない。

「あ、兄貴」

「閃」

だが早速閃と遭遇した。箒を持っているので掃除中なのが分かる。閃の言葉に反応したのか、次から男子生徒が3人閃の隣に来た。彼らも5歳年下なので健のことが見える。

「え、まさかこの人が閃の兄貴」

「な、なんか感想しづらいな」

「それはどうも。閃、今日は別件でこっちに来たので失礼します」

そう言っつて健と栞は閃を避けて2組に向った。この時、ある少女がずつと健の事を見ていた。

健と栞は2組についてそのまま教室をのぞいていた。そいてそこには立った一人で端っこを掃除している陽菜の姿があった。ほかの生徒は話し合いながら掃除しているのに陽菜はさびしそうな顔をしている。

「ちょっと、どいてくれる」

「う、うん」

そして女子生徒にもあまりいい扱いはされていないみたいだ。健はそんな彼女を他人事には見えなかった。

陽菜のクラスの掃除が終わり、次々にそのクラスの生徒が帰っていく。その中で陽菜は少し教室に一人で椅子に座っていたが、しばらく時間が経ったあと立ち上がり教室を出た。

陽菜は靴を履き替えてそのまま校門に向った。

「あ」

「こんにちは日高さん」

「初めまして」

校門前に待つていた健と栞は挨拶をした。陽菜は丁寧に一礼をした。その後2人は邪魔になるとおもい、校門前に待つことにしたのだ。健は陽菜のあの様子をみてすぐに彼女が今どういう環境にいるのかわかった。

「ど、どうしたのですか？」

「昨日の話ですが、その件は僕からお願いをしにきました」

健の言葉が違ったので栞は表情で驚いていた。だがすぐに分かった。あれだけで健の気持ちが変わったことを。

「僕は、君を助けたいです」

「助けたいって？」

「ここでは邪魔になりますし、近くの公園でも」

こうして話し合うために学園から離れる健たちだった。

南龍公園なんりゅうこうえん。この学園の一番近く、でかい公園である。ここなら狭いところよりもゆっくり話せるだろう。

「あの、私を助けるって」

「すみません。勝手なことですが、君を見過ごせなくなってしまっ
って」

「見過ごせなくなってしまった？」

健の言葉に陽菜は首を傾けて聞いてくる。やはり、これだけでは彼女に伝わらない。やはり直接にいうしかないだろう。

「さつき、君が掃除をしているところを見ました。そしてそこには悲しそうな顔をしていた君がいました。一人ぼっちの」

「見ていたのですか」

「す、すみません」

悲しそうな顔をした陽菜の言葉に急いで栞が謝る。健も同時に申し訳ない顔をする。だが、今は彼女の心を何とかしなければなら
ない。

「話してみてください。君の気持ちを。僕は何時間でも、何日でも聞いてあげます」

「私もです」

「あ、ありがとうございます」

こうして何とか陽菜は話してくれることになった。本当は健は彼女の世話役を頼まれていたのだが、もう我慢が出来なかった。小さな女の子、ましてや小学生の子が一人にいるのはかわいそ過ぎる。

それを何とか話して楽になってほしい。そして、聞いた後には必ずあの言葉を言おう。健はそう思っていた。

健

「私、実は孤児だったんですよ。今は初等部の学園長のところでお世話になってます」

僕はこの時分かった。彼女が学園で一人の理由が。だが、僕はあえて声には出さなかった。彼女の言葉を静かに聴くこと。それが今僕がやることだからです。

「私はそれで、何の實力も出せず、なのに私はこれをもらってしまいました」

そうやって日高さんは腕についている白い細いブレスレットを見せてきました。僕はこれがなにかすぐに分かりました。

「これってDUSですか？」

「はい。発動したら杖になります。これをもっているから私はみんなから卑怯に見られました」

なるほど、これでみんなが彼女を避けている理由は分かりました。

「実を言いますと、これは始めは私もお儀母さんも分かっていたのですよ。なのに、授業中に勝手に発動して。私はあれからこれを発動はしませんでした。みんなに卑怯の目をされて」

そうですか。彼女は僕と春皆さんと同じく勝手に発動してしまった。その時の彼女の驚きと、一人にされた悲しい顔が同時に僕の目

に映ってきました。

かわいいそ過ぎます。彼女は、ただ普通に暮らしたかっただけなのに、運命がそれを封じてしまった。理不尽すぎます。

「わたしは、何を話そうとしても聞いてくれなくて。そしてそして」

日高さんは話している途中に涙を流してしまった。まるでためていたものがあふれ出したように。泣きたくっても泣けなかったんだろ。これ以上は、耐えられません。

健は泣き出した陽菜をいきなり抱きついた。そして、やさしく伝える。

「もう、いいですよ。たくさん泣いてください」
「う、うう」

陽菜の目にさらに涙が出てくる。健は頭を撫でながらさらに伝える。今の彼女にはこの言葉が必要となるだろう。

「僕が君の見方になります。君のそばにいてあげます。ですので、もう我慢しなくていいのですよ。泣きたいときは泣いてください」
がんばってきたのだろう。そんな小さい体でたくさん理不尽な運命にあっても泣かないでがんばってきたのだろう。

「ほ、本当？お兄ちゃん？」

「本当ですよ」

そして、陽菜の声は落ち着いた感じが無くなり、歳相応のかわいらしく、弱弱しい声を出した。

「僕たちは、友だちです」

この後、陽菜は数分間泣き続けた。そして落ち着いた頃、改めて話しを再開した。

「がんばりましたね。いままで」

「うん。ねえ、一つ聞いてもいい？」

「なんですか？」

その声はもうかわいらしく、すべて出し切った感がある。

「お兄ちゃんは、なんで私のことを」

「僕は、学園内では忘れられた存在なんですよ。もう、なれましたが。そして春皆さんも入れて、僕たちは同じようなDUSを持っています」

「お兄ちゃんたちも勝手に発動したの」

「はい」

栞も健の隣でうなづく。同じような電波が放たれているこの3つのDUS。なにか秘密があるのかまだ分からない。

「日高さんはこれからどうします？」

「ううん。陽菜って呼んで。お兄ちゃん」

「分かりました。陽菜ちゃん」

「うん。私はとりあえず帰ります」

「そうですね。それでは今日は解散しましょう。春皆さんもいいですよ」

「はい」

そういうことで、今日はみんな帰ることになった。明日は休みで健は忙しかった今週の疲れを取ろうと考えながら家に着いた。

「あ、お帰り健ちゃん」

「ただいまです母さん」

家に着くと母の寧々が話しかけてきた。ものすごく顔が微笑んであり（本当はほとんど変わらないが）なにかいいことがあったのだろう。

「ねえ。明日炎さんが帰ってくるって」

「分かりました。買い物行ってきます」

父である炎が帰ってくる日は必ずと言っていいほど寧々がパーティをしたがる。そのための買出しはいつも家事担当の健がすることになる。それを分かったので健は即座にUターンして家を出た。どうやらもうしばらくは休めそうにも無い。

駅前近くの大きなスーパー、【スーパーふくろ】だ。品そろえもよく、健はよくここで買い物をするちなみにレジのときは買い物籠を置くので意識されて見られるのでなんとか出来る状態である。

（さて、メニューはいつもどおりですよ）

そう言つて健は即座にいろいろな商品をかごに入れる。テキストに入れてみると見えるが実はめがねの上の隙間を見て即座に新鮮な野菜とかを選んでゐる。この時にこの眼は役に立つらしい。

(これぐらいですかね)

健は早くもほしい商品手に入れてレジに向おうとする。だが、その時あることを思い出す。その瞬間、いきなり放送が流れ始めた。

『今からマグロの販売が始まります。早い者勝ちですのできおつけてください』

健はそれを聞いたと、すぐにその場に向つた。長年家事担当している健がそのことを見逃すはずが無い。だが、同時にたくさんのおばちゃんたちが群がってくる。やはりマグロ目当てだ。だが、この凶暴なおばちゃんたちも健の敵ではない。

その場所に着いたのはいいが、その場はすでにおばちゃんたちの戦場と化していた。今日もいい戦闘ぶりだ。だがそこで健はそれを見ている知っている少女を見つけた。

「春皆さん」

「い、五十嵐君。五十嵐君もマグロを買いに」

「ええ。春皆さんもその様子で」

「は、はい。でもこれは」

春皆はおばちゃんたちの戦場を見て少し怖がっている顔をした。

まあ、普通の人はおっかない顔で見るだろう。

「よかつたら春皆さんの分も取りに行きましようか？」

たしかこのマグロは一人一切れだ。一切れと言うと小さく聞こえるがその一切れは結構大きい。すしにすると何貫作れるんだが。そして、この店はこういうものはほかのものと一緒にレジで済ましてしまったためにレジを通る前に渡せば問題はない。

「で、でも悪いですし」

「いいですよ。慣れていきますし」

そう言っただけはおちゃんの戦闘場所に入り込んで行った。だが、一分もしないで健は2つマグロを持って帰ってきた。

「はい。戻りました」

「は、早いですね」

「どうせみんな僕のこと、気づいていませんから」

つまり、健は波に任せてどんどん前に来て速攻で戻ってくれたと言っただけだ。恐るべし健の影の無さ。

「あ、ありがとうございます」

健からマグロを受け取った栞は頭を下げた。まさか、自分の影の無さを利用するとは思わなかっただろう。意外と自分の能力を利用する健だった。

次の日の昼。あの男が帰ってきた。場所は五十嵐家の目の前である。

「よう、我が愛する家族たちよ!!」

車からテンションが高い男、五十嵐炎が言ってきた。寧々はものすごく喜んでいいる顔をして、健と閃は呆れていた。

「親父、その言葉前も言っていた」

「そ、そうか？まあいいじゃねえか」

そう、閃が言ったとおり炎は前にもこのことを言って車から出てきた。見事な再現でした。

「久しぶりです」

「父さん。ご飯の用意できていますよ」

「お、杏ちゃんも健も元気そうだな」

ちなみにこの場には杏もいる。杏も炎とは何回も面識がある。とりあえずはこの家族は非常に仲がいい。特に母と父が。

リビングで食事を全員でしているとき、炎は一回ここをはなれてそして大きな箱を持って現れた。

「父さん。何ですかそれは？」

「これは健と閃のお土産だ。俺たちが開発したものだぞ」

ちょっとチャラけた父親だが、仕事のほうは好成績を誇っている。さらに開発技術もレベルが高いのだ。そんな炎が作ったものだから意外と機械が好きな健にとってはおもしろいことである。

「じゃあ開けるぞ」

そう言っただけが開けた箱の先には黄色の耳が長く健の顔より一回り小さいねずみとものすごく小さい緑の亀が置いてあった。

「父さんこれは何ですか？」

「食べれるの？」

鳥の足のお肉を食べながら杏がこつちを見に来た。今の状態の杏が言っただけの説得力があると言うか、冗談に聞こえない。

「父さん、説明をお願いします」

「健ちゃん、私無視した!？」

そんな杏をほっという健はこれが何なのか説明がほしかった。

「これはな、デジペットってな、機械でもないし本物の動物でもないけど本物に見える。それがこのデジペットでさらには特殊な能力がある」

そう言っただけは手元のスイッチを押した。そしてその瞬間、ねずみと亀は動きだした。

「このねずみはクキユウという名で健のデジペットだ」

そう言っただけクキユウは背中から羽を出して健の周りを飛び回る。どうやら人間の言葉が分かるようだ。

クキユウの特徴は黄色いからだとかわいらしい顔。で羽は自由に出したり隠したり出来るそうだ。

「きゅー、きゅー!」

「かわいらしいですね」

「ちなみにものがごく人形みたいなやわらかさだぞ」
「本気ですか!！」

その言葉でぬいぐるみ好きの健の目が光った。何を隠そう健はぬいぐるみがものすごく好きなのだ。実際、部屋の一つの押入れはかわいらしいぬいぐるみが集まっている。

「そして、この亀がキユウと閃のデジペットだ」

「おう」

「ですが、これ預かって僕たち学校が」

「ああ。別に連れて行っていいぞ。許可は取った」

「さすがですね」

こうして五十嵐家に新たなペットが増えた。

月曜日。健は今日も幼馴染の杏と登校しに来た。だが、今日も
う一人。いや、もう一匹いる。先日もらったデジペットのクキユウ
だ。

「きゅう、きゅう」

クキユウは健の肩の上でご機嫌よく鳴いている。なんかその声で
朝がかわいらしく思える。あの日からどうやら健はクキユウに懐か
れたようだ。朝なんて健の顔の隣で寝ていた。どうやらデジペット
は寝ることによりエネルギーを回復させるようだ。なんのエネルギ
ーが分からないが。ちなみに炎はもう仕事のため出て行った。

「それ見たらみんな驚くね」

「まあ、確実に気づくのは春皆さんと葉柱さんですね」

「いや、それでもみんな珍しいものがあれば気づくと思うよ」

健の言葉の後に杏が言い返す。まあ、少なくともクラスのみんな
は気づくと思う。そんな会話をしていると学園に着いた。

「杏。先に教室行ってください。僕は一旦学園長室に向います」

「うん。分かった」

この時2人は気づいていた。もう回りからすごい目線で見られて
いることを。特にいつも見られていない健にとってこの目線は苦痛
以外の何者でも無い。健は急いで人がいない学園長室に向った。

「失礼します」

「入っていいよ」

智子の言葉が聞こえて県は学園長室に入ってくる。智子はコーヒを飲みながらくつろいでいた。

「どう、陽菜ちゃんのこと？」

「友達になりました」

「そう。ありがとうございます」

「お礼は結構です。僕が友達になりたいからだったので」

「そう。しかし、本当にデジペットをつれてくるとはね」

そう言っただけで智子はクキユウに視線に合わせる。どうやらこの言葉だと認めているの本当のことらしい。改めて健は安心する。

「まあ、これで君たち3人はマスターとなったわけね」

「まあ、それは決まりですが、陽菜ちゃんは大丈夫なのですか？

まだ小学生ですよ」

「だから健坊がいるのよ」

「……ああ。そういうことですか」

つまり、小学生の陽菜は健と一緒に行動が義務つけられたということなのだ。だが、まだ約束は残っているそれは非公開ということだ。

「そろそろ教室戻りなさい。非公開の約束は守るわよ」

「ありがとうございます。失礼します」

そう言っただけで健は頭を下げて学園長室を出た。智子は健が出ていった後、置くの窓ガラスから外を見た。

「お礼を言いたいののはこっちよ。ありがとね、健坊」

智子は口元が微笑んだ。彼女は実は約束はいつでもよかった。ただ、陽菜さえなんとか一人にさせない、友だちが作ることが出来れば

朝のHRが終わり、栞は健の席に行つて目を輝かせていた。そしてその回りにはたくさんの女子も一緒にいた。

犯人はただ一人、クキユウの存在だった。

健が教室に入ってきたときにチャイムが鳴り、そのままHRが始まった。もちろんその時のクラス全員の視線は健ではなく、クキユウに合った。ちなみにクキユウはずっと健の周りで飛んだり健の体をよじ登っていた。

「ゆ、優輝君。なんですか？このかわいい生き物は？」

「デジペットですよ。一様生き物ではありませんね」

「すっごくかわいいわね」

栞と同じく夕日も目を輝かせてクキユウを見る。周りの生徒も早く近くに見たり触ったりしたそうだ。だが、回りの声は「なにこれ？」「誰のペット」「っとそういう会話のみで健のことを気づいていく様子には見えない。

「はあ」

健は何か疲れたようにため息を吐いた。

少し時間は戻り、初等部での6年3組の中も騒がしかった。理由は健と同じくデジペットのことだ。閃も同じく学園に連れてきたのだ。もう回りは女性ばかりだ。

「ないこれ、かわいい」

「ちいさ〜い」

「うおっ、閃の回りに女子ばかりいる!!」

教室に入ってきた広が閃の回りを見て驚いた。いつもは男子しかない閃の回りに女子ばかり待つ待っているのだ。それは失礼だが驚く。

「閃がデジペットなんていうのを連れてきたんだ」

「しかし、本当にかわいかったな」

徹と信二はうんうんと言って納得する。

「お、俺もなんか見たいかも」

それを聞いた広も見たがっている。だが、その3人はそんなことよりもそれだけのことで集まってくる女子をみて、だんだん閃に腹立ててきた。

「なあ、あいつもしかしたらモデルのじゃねえの？」

「俺もそう思ってきた」

「だが、それは俺たちにとっての宣戦布告とんでもないと思うぞ」

「どうしたの？」

その時、後ろからかわいらしい声が聞こえて3人は一斉にビックリしたように背筋を伸ばす。後ろを見たらそこには登校してきた春海とその友達がいた。春海は早速教室を見て事態を把握した。

「なに、これ？」

「閃だよ。閃」

「五十嵐くん、来てるの？」

「お、おう」

信二と広の言葉を聴いて春海は頬を少し赤く染める。その表情に男子3人はまた顔を集める。早くも第2会議だ。

「おい、これって」

「ま、まさかだよな」

「今情報を整理したらありえないことでもないぞ」

「マジかよ!!」

徹の言葉により、さらに3人、特に信二と広の殺気が高まる。そうしている間にも春海は閃のところに向っていた。

「あ、あの五十嵐くん」

「な、なんだ白本？」

いきなり好きな女子、春海に話しかけられて閃はドキッとする。

「五十嵐くん。いえ、閃くん!!」

「は、はい!!」

いきなり手を握られてさらには下の名前で呼ばれてさらに閃のド

キドキが増していく。同時に回りの男子の殺気も増していく。

「お兄さんのこと教えて!!」

「え、あ、兄貴のこと!？」

その言葉によりみんな「え!？」つという顔をする。一番驚いていたのは一番近くにいた閃だが。

「あ、兄貴がどうかしたのか？」

「そ、それはね」

閃がそれを来た瞬間、春海の顔がさらに沸騰したように熱くなり赤くなる。その行動で閃は状況を把握した。

「まさか、俺の兄貴に惚れたのか」

「え、つと、そ、その」

春海があたふたし始めたことでそれは推測から真実に決まった。回りの男子は春海に好きな人、それもクラスメイトの兄だと言うことに驚いた。多分、この前。健がここに来て、その時一目ぼれしてしまったのだ。

閃はこの瞬間、自分の恋の相手に好きな人がいることを知ったことと同時にその相手が自分の兄という最悪な真実を知ってしまった。

「と、言うことでお兄さんのこと、教えてくれたらうれしいな」

「わ、分かった」

閃は悟った。ここで断れば確実に自分の恋はおわる。なら、相談相手になり、自分が素敵な男だと気づかせるしかない。

こうして閃は思い宿命を背負うことになった。

普通の現代文の授業のとき、教科書の読みを健の前の出席番号の生徒が読んでいた。段落わけなのですぐに健に順番が回るはずだった。

「では、次。岡本」

「はい」

前の人を読み終わった後、先生は健ではなく、次の出席番号の人を呼んだ。相変わらず健は忘れられている。だが、こんなことでは報告するまでも無い。だが、今は少し状況が違う。理由はただ一つ。それは健の机の上でクキユウがかわいらしく寝ているのだ。それでも飛ばない限り健の存在は誰も気づかない。

「……………ZZZZZ」

それと同時に杏も机の上に顔を乗せて思いつきり寝ている。これもいつもの日常茶飯事である。健も夕日もそんな杏に呆れていた。

「杏ったら」

(これはまた同じことになりますね)

健は分かっていたこれはまたテスト前になると杏は開き直すことを。中学からこうして授業中は寝ていたのもう後のことを理解していた。本当にこの学園でなければ高校に入れないだろう。それぐらい、今の杏の学力は乏しいのだ。杏曰く、先生の話は睡魔の電波

らしい。

「むにゃむにゃ。もう食べられないよ〜」

杏はいかにも古い寝言を言い放っていた。ちなみにちなみに杏の寝言はすべて食べ物関連のことだ。杏の生活は寝る、食べる、遊ぶの3神器がそろっている。

授業が終わるチャイムと同時に杏は起きた。起きるのだけは正確である。そしてそのまま杏は健の席に来る。

「健ちゃん。次の授業は何だっけ？」

「日本史です」

「に、日本史かあ〜。よし、寝よ!〜!」

健はツッコまず、そのままスルーして次の授業の準備をする。この言葉ももう何回も聴いたのだろう。

ガラッ!〜!

その時、教室のドアがまるで綺麗に開いた音がした。そこには金髪のパーマがかかったロンヘアの少女がいた。その髪はなんだか高貴な人に見える。

「五十嵐健はいらっしゃいます?」

そして彼女はなぜかいきなり健の名を呼んだ。健は自分の名を知り合い以外に呼ばれたことが無いためにまったく気づかずに本を読

み始める。

「五十嵐健はいらっしゃいます?」

少女はまた同じ言葉で健の名を呼んだ。だが、健は返事するどころか振り向きもしない。しかもシカトではない分、タチが悪い。

「ねえ、健ちゃん。あの人、健ちゃんを呼んでんじゃないの?」

「僕ですか?」

「五十嵐健はいらっしゃいます?」

「本当ですね」

健は否に言われてやっと自分が呼ばれていることに気づいた。健は本に頬を挟んで少女に向かって声をかけた。

「僕ならここにいますが」

「いないのですか?」

だが、健が返事をしても気づいている様子は無い。これでは呼んでいるほうも意味が無い。それどころかあきらめて帰ろうとしている。

「その場にいるのに無視されて帰られるのは困りますね」

そう言っただけで机の上で寝ているクキユウをつかんで、少女に向かって思いっきり投げた。そして彼女の頭に見事にくキユウが当たった。

「な、何ですか?この生き物は?」

「きゅー!」

少女はそういいながら不機嫌な顔をして頭に引つ付いたクキユウを掴み取った。体をつかまれながらクキユウはかわいらしく鳴く。だが、少女の不機嫌な顔は治らない。そして彼女は周りをキョロキョロと見渡す。

「誰ですか？この生き物を投げたのは」
「ちよっといい？」

そんな少女に近づいたて声をかけたのは杏だった。後ろには健もいるが少女には見えていないだろう。クキユウは杏の周りを飛び回る。

「あなたが五十嵐健？女性でしたのね」
「違うよ。健ちゃんはこっち」

そう言っ杏は健がいる方向に指を指す。だが、まだ少女には健は見えていない。

「何を言っているの。まさかこの私をバカに」
「よく見てよ。ちゃんといるじゃない」

少女は杏に言われたとおり指差された方向をよく見る。そしてだんだん人が彼女の目に映ってきた。

「どうも」
「だ、だれですか？いつも間にそこに！！」
「ずっといましたよ」

驚く少女に健は呆れながら言う。だが、初めて彼を見たら確かに

そうなるだろう。健はそのことを分かっているか分かっているのか分からない。

「で、あなたが五十嵐健なの？」

「はい。あなたは？」

「ま、まさかこの私を知らないのですの！？この大型企業の真田家の長女のー真田美穂を！？まさか、そんなのが知らない人がこの学園にいたなんて」

美穂は扇子を広げて高笑いをした。このとき分かった、彼女は上から目線でことを言う人だと。

「今知りましたが、真田グループなら知ってますよ。確かに有名ですから」

「いや、私は知らなかった」

「君はニユースを見なさい」

杏の言葉に健は呆れてツツコむ。そんな二人のコントを上から視線の人が見逃すわけではない。

「いいから話を聞きなさい、五十嵐健！！」

「なんですか？」

「私はあなたに決闘を申し込みますわ」

「へ？」

いきなりのことで健は聞き返した。

「忘れたと言わせませんよ。東条家の人のことを」

「まあ、あんなことが合ったので違う意味で覚えています」

正確には栞の初の発動と、自分の自らの発動のことがあったことだ。対戦相手の二人はとりあえず覚えているのと等しい。

「今日の放課後、第一戦闘ルームに来てくださるわね」

「は、はい」

健は分かった。どうやらあのときの出来事一つでいろいろなことが起こることを。そして、この戦いは自分一人で戦うことになるのも。

「放課後、決闘ですわ!!!」

このセリフを言っただけで美穂は自分の教室に向かって行った。これはいわゆる敵討ちと聞いていいのだろうか。だが、それなら健にこう言ってくる意味が分かる。しかし健はあまり良い気分にはならなかった。

「かたちうち？」

「それを言うなら敵討ちです。ですが、僕は一切東条さんたちとは勝っていません。なので決闘する意味が分かりません」

そう、結局はあの試合は時間切れの引き分けだ。そして健はその引き分けに納得している。その時、健の足元に一通の封筒があたり、心配してこつちに来た栞が気づいて拾って健にわたした。

「五十嵐君。これ」

「あ、ありがとうございます」

お礼を言っただけで健はその封筒を開けた。そしてその中に入っていた手紙には筆で書いたらしく、ものすごく下手な字でなにか書いてあった。これを見た周りの3人は一瞬固まった。

「健ちゃん。これな？」

「なについていわれなくても」

「いお、読めますか？」

「『あの日、よくも10組の私を侮辱してくれましたわね』って、書いています」

健は柔によそう言われて何とかメガネの上の隙間を見て読んでみた。しかし、この字は本当に下手で、蛇を書いているようにしか見えない。てか、なぜに筆で書こうとしたのか。決闘状だからか。

「よ、読めるのですか？」

「さすが健ちゃん!!」

その声を聞いた夕日もこっちに来た。話はどうやらさつきからずっと聞いていたらしく説明は不要だった。

「ねえ。続き読んで」

「はい『こんなグズで品の無いクラスのやつに10組の私が負けるはずありませんわ!!そこで、今度は私の親友の美浦と戦ってもらいますわ。あほでまぬけでグズで品の無いクラスの人に勝てるのかしら』ですって、どっちが品がないのですか」

完全にあほとかまぬけとかそしてこんな汚い字を書く人が品がないと言えない。だが、それよりも、その言葉を聴いた生徒たちは全員怒りが込みあがっていた。ちなみにクキュウが健の頭の上に乗っているため健の存在が少し上がっている。

「むかつくなあ!!なんだよただの貴族の癖に!!」

「どっちが品が無いのよ!!」

健と同じツッコミをした人がひとりいたが、みんなこの手紙はみんなの怒りを上げさせたのは間違いない。

「やってやれ五十嵐!!」

「そうよ、あの鼻をへし折って!!」

男子生徒、女子生徒ともに健を応援しだした。杏も同じく腕を上げて健を応援する。

『で、五十嵐って誰！？』

その瞬間、杏が一気にこけた。栞は愛想笑いをしており、夕日は呆れていた。健は何も動じないでクキュウのほっぺたを引っ張って遊んでいる。

その日の放課後。言われたとおりに健は待ち合わせの場所に来た。その場所は第一戦闘ルーム。戦闘ルームとは生徒が電子人体強化の自習を行える場所でもある。もっとも使えるのは中等部になってからであり、初等部の生徒は使えない。部屋の中はすでにデジタルフィールドが常に展開している。なので中に入ればすぐに電子化されるのだ。

「絶対勝てよな五十嵐！！」

「負けないでね五十嵐君！！」

健と一緒に来たクラスメイトが健を応援する。今は全員杏に教えられて健を見ている常態であり、多分学園から離れると忘れてしまおうだろう。

「お兄ちゃん。がんばってね」

「で、健ちゃん。この子は誰？」

健の横には小さい少女、初等部の生徒である陽菜と一緒にいる。

その陽菜を見て杏は聞く。陽菜を呼んだのは実は健だ。変なUSを持つていることを証明したいのだ。

「どうやら、恐れずに着たみたいですね」

「どうも」

美穂の言葉に健は冷静に返す。その態度に更に美穂はなんかイラつきだした。その証拠に怒りマークが見事に頭上についている。

「まあ、いいですね。早速始めましょう」

そう言っただけで美穂は部屋の中に入る。健も続けて中に入る。そしてデジタルフィールドの色は青から赤に変わり、ドアのほうにはLOCKの文字が浮かび上がる。これでは入れないことになった。

「がんばってね。健ちゃん」

「おにーちゃん。がんばって!!」

「しっかりするのよ」

「応援してます」

クラスの生徒を抜かして杏、陽菜、夕日、栞の順番で健に声援を送る。ちなみに美穂サイドの応援は金平と東条のみだ。どうやらこんなに生徒が来るなど思っていなかったのだろう。まあ、こんなに来させたのはもともとは東条の手紙のせいであるが。

壁に両者のライフゲージが出てきてついに試合が始まった。

「では行きますわよ。発動しますわ」

美穂の髪飾りが光、そしてそのまま細く雪の結晶のような刃がっ

いた槍の形に変化した。これが彼女のDUSらしい。

「開放します」

健は両手首にガントレットをつけて唱えた。その瞬間、ガントレットから出てきた影が健に纏いさせてた。

「さあ、試合開始ですわ」

「行きます」

そうやって健はメガネを取って赤い裸眼を出したこの目のほうが集中がしやすいのだ。その瞬間に美穂はすでに健の近くに来て槍を振ってきた。健はすぐに反応してジャンプして避ける。

「どうやら、この攻撃の反応は出来るようですね。さすがは私の友にやられなかっただけはありますわね」

「どうも」

健は後ろに下がって美穂の言葉に答える。そして、美穂は次に槍を突く体制に構えた。その瞬間、回りの空気が冷えたように感じた。

「あなたは、真田幸村を知ってますか」

「有名な戦国時代の武将です。あの家康をびびらせたほどの槍の達人です」

美穂の言葉に、健は分かりやすく簡単に答えた。だが、なぜ今それを聞く必要があるか分からないが、油断を誘うものではないらしい。

「わたしは、あの人を尊敬してますわ。そしてあの人が私の力に

なっくれますわ」

美穂のその言葉に乗るように槍は回転しだした。そして回りについている結晶の刃がいきなり燃え出した。

「いきますわよ真田丸、【大坂冬の陣】」

そして、その炎は槍の矛先まで燃え移った。これが美穂のDUS【真田丸】の能力だ。

「幸村は代々、ゲームやアニメでも炎の使い手となっておりますわ」

「だから、炎ですか」

「そうですね!」

美穂は炎を纏った槍で健に向かってダッシュする。そして近距離に入った瞬間、槍で突いてくる。その攻撃は健はなんとか避ける。この炎も攻撃の一種。当たるとダメージを受けてしまう。

「やはり、動きが初心者ですわね」

美穂はそう言って健の片足を足で払う。健はそれに気づいた瞬間にはもう遅く、そのまま尻餅をついてしまった。

「観念してください」

そう言って美穂は健に向かって槍を突き刺す。健は横に転がって何とか避ける。だが、起き上がる瞬間にも隙は出来てしまう。しかし、真田丸は見事に地面に突き刺さったのでその心配はしなくとも良かったみたいだ。

「逃がしはしませんわ」

美穂は真田丸を地面から抜いて、そのまま振り回す。同時に炎の量が更に増していく。

「はあああああ！！」

次に美穂は真田丸を健にむかって切りかかった。まるで炎が刃となつてまるで長い刀になつていて大きく避けなければ当たつてしまふ。もちろんそのことを健は分かっていたが、美穂がさつき言つていたとおり、健は戦いとかの動きが初心者。もちろん、道場みたいな流派みたいなのはない。

「鈍すぎますわ！！」

美穂は思いつきり足を踏み込んで勢いがある一太刀を振ってきた。集中している健は避けたが、その刹那、美穂はものすごい速度で真田丸を回して持ち返してまた足を踏み込んで勢いがある一太刀を健にお見舞いした。

「くっ」

このフェイントには遅めの反応をしてしまい、腕で防ぐのがやつとだった。だが、炎を纏っているこの槍に触るのも禁物。健のHPゲージが少し減っていく。

「やはりですか。戦いを慣れていませんねあなたは」
「今頃ですか」

やっと気づいた美穂に健は槍を受け止めた腕を振りながら答える。だが、美穂が驚くのは当たり前だ。なぜならマスターならそれなりの戦闘知識を備えているものだ。逆に無ければマスターにはなれないのだ。しかし、健に戦闘知識は皆無。これではマスターどころかAランクにもなれない。

「あなた、どうやってマスターに」

「残念ながら、僕はマスターではなく、最弱のDランクです」

「では、なんですかその姿は！？その鎧のDUSすら初めて聞きますし、それもザコのDランクの生徒があつたつていいるのですか！？」

「そういうことです」

美穂の葛藤に健は冷静に対処する。その言葉を聞いた美穂は体をぶるぶる震わせた。そしてものすごい目つきで健をにらみだした。

「分かりました。では、私が勝ったらそのDUSをいただきますわ。それはザコのDランクの生徒が持っているいいものではありませんわ！！」

「なら、僕も、負けて入られません。これを僕はもっと知りたいのですから」

「知ったことが！！真田丸、【大坂夏の陣】！！」

美穂がその言葉を吐いたとき、真田丸の矛先の炎が更に増して巨大な刃に化した。

「さあ、これで終わりですわ！！」

そう言って美穂は健に向かって真田丸を振り回す。健は指から赤く長い爪を出して対抗する。武器同士ならダメージは無い。

「なんですか？さつきよりも動きが」

「美穂、こいつは時間が経つとなぜか動きが良くなるのよ！！」

悩んでいる美穂に東条が大声を上げて教える。だが、もう今頃言ってももう遅い。あの会話で結構な時間が経っている。つまり、健自体も結構な集中が増してきたのだ。

「な、何ですか？」

「僕も良く分からないです。あと、一つ言っとくことがあります」
そう言っただけは後ろに下がりながら言葉を続ける。

「幸村の本名は真田信繁といいます。お忘れなく」

「知りませんわ。そんなこと！！」

そう言っただけ美穂は大降りで攻撃してきた。だが、その刃で大降り
は小柄の健にするものではない。健は一瞬の合間に美穂の懐に入っ
た。

「行きます」

「なるほど、そういうことですね」

美穂はそんな健を真田丸を回して対抗する。

ウィーン！！ウィーン！！

『！！』

その時、いきなり警報が鳴り出した。同時に両者のHPゲージが

消えていく。これは、勝負中断の証である。だが、フィールドの色は青に戻らずに赤いままだ。

「何ですか？」

「まさか、またですか」

この感じは、健がウイルスたちに襲われたときと同じ感じだ。

次の瞬間、いきなり床から大きな穴が開いた。そして、そこから変ないのししみたいなデジタルモンスターがでてきた。大きさも結構ある。

「勝負は、お預けですね」

「仕方ありませんね」

戦いは共に中断し、まずは、あのいのししの消去デリートに入ることにした。

放課後前、健たちは話していた。内容はもちろんあの決闘のことだ。杏はそのことにちよつとした疑問を抱いていた。

「健ちゃんが戦いを受け入れるなんて珍しいね」

「そうですね？僕は逆だと思えますよ」

健の言うとおり、受ける以前に健は決闘を申し込んでくる相手は一切いなかった。多分、これが始めての決闘であろう。

「でも、それでも断ると思ったよ」

「まあ、このクラスのことを悪く言いましたからね」

「そう言っても、いままであんたを忘れていた連中ですよ。今もそうだと思うけど」

夕日が強く言う。確かに、このクラスの連中は健になにか特別なことをしたことも無い。むしろ忘れられていた。

「そんなの関係ありません。弱いと言われたら誰だってそう思いますよ」

「普通、思わないわよ」

「僕は、弱いと言うのは力だけのことではないと言いたいのですよ」

「それを人のためって、あんたお人よしね」

「夕日、それが健ちゃんだよ」

夕日の言葉ににこやかに杏が答える。健の言葉は決して偽りではない。弱さとは、今の健が持つものだから、そのことを良く分かつ

ているのだ。

「でも健ちゃん、女の子殴れるの？」

「ええ。だから殴りません」

「つまり、それは長期戦に持ち込む気なの？」

「ええ」

殴らない。それは攻撃しない。それ以外で勝つ方法はただ一つしかない。それは、持久戦だけだ。健はわざと持久戦に持ち込む気であるのだ。

「大丈夫なのですか？」

「体力だけは、自身があるので、それにやはり女性は殴れませんよ」

心配する栞に健は微笑む。とりあえずは作戦は決まった。もちろん今の状況など考えても見てはいなかったが。

巨大ないのししの形をウイルスモンスターを前に、健と美穂はとりあえずは試合は中断。今はあのモンスターの消去を優先^{デリート}することだ。

「一緒に戦うのなら、足手まといにならないでくださいね」

「気をつけます」

美穂が健に振り向いてそう言ったとき、モンスターの後ろ足はある準備をしていた。健はモンスターのその仕草が何なのかすぐに分かった。

「真田さん。来ます」

「え？」

しかし、もう遅い。もうモンスターはこっちに向かって猛スピードで遅いかかってくる。さっきの仕草は動物の助走的意味を持っていたのだ。

「真田さん。僕を見る暇は無いと思いますが」

「そ、そんなことありませんわ」

健の一言で何とか避けられた美穂は言い返した。だが、確かに余所見をしている暇はない。

「グモオオオオオオ！」

止まったモンスターはこっちを向いていきなり吠え出した。そして頭の角から一気に巨大なビームを放ってきた。翔たちは咄嗟にこの攻撃を避ける。

「そんな、遠距離攻撃ですよ!？」

「結構威力がありそうですね」

驚く美穂と違って健は冷静に敵の動きを見る。今何を驚いたって状況は変わらない。それは今まで自分が一番分かっていることだった。

「グモオオオ!!」

「また助走です。回避の準備をしたほうがいいですね」

「いいえ。ここは特攻ですわ!!」

健の言葉が無視して一気に美穂はモンスターに向かって駆け出した。確かに今の状況、相手は隙が出来ている。だが、肝心なタイミングが分からない今うかつに飛び込むのは自殺行為でもある。

「私をなめないで下さるかしら。【大阪夏の陣】！！」

美穂のDUS、真田丸の先から炎が出てくる。そのまま攻撃する気である。

「グモオオオオ！！」

だが同時にモンスターは一気に駆け出した。真正面には美穂がいる。健は助けに行こうとするがもう間に合わない。

「残念ですわね」

だが、美穂は真田丸を使って棒高跳びのように空中を舞った。この動きでモンスターの攻撃を回避した。

「そんなこと、はじめから分かっていますわ。そして、このまま攻撃すればすべてが終わりますわ。【大阪冬の陣】！！」

美穂の真田丸がさらに燃えて大きな刃が作られる。確かに後ろの攻撃なら避けられないはずである。美穂はすぐに槍を一気に降り下げた。

「はああああ！！」

誰もが決まったと思った瞬間。モンスターはいきなりドリフトな

みのすべりで攻撃を避けだした。

「な、なんで今の攻撃を！？いくら早くつても今の瞬間では」

「真田さん。あのウイルスモンスター、足にローラが付いています」

「な、何ですって」

そう。健が言ったとおりあのモンスターの足元にはローラが着いていたのだ。そのおかげであるような回避方法が出来たのだ。

更にはリターンして逆に美穂を狙いだした。着地したばかりの美穂と、ローラーによって早さが増しているモンスターの攻撃を受ければひとたまりも無い。

「危ないです」

だが、ここで間一髪、健が美穂を抱えて突撃を避けだした。あのときで健は美穂の方向に向かっていたので。

「真田さん。どうやらあのモンスターは攻撃よりも速さを気をつけたほうがいいみたいです」

「分かりましたわ。あなたはサポートに回ってくださいませわね」

そう言って美穂は健の元から離れてモンスターに向かって駆け出した。同時に【大阪夏の陣】を発動する。モンスターはそれに立ち向かうように美穂に向かって駆け出す。それでも美穂の足は止まらない。

「一騎打ちなら負けませんわ！！」

「いや、これは」

その瞬間、モンスターは炎を貫通してさらに美穂に強力な角の一撃を当てた。

「そんな、嘘ですよ」

驚きながら吹っ飛んでいった。健はまた美穂をキャッチして抱える。そして、美穂の体の中心に穴を開いている。しかもこの傷口から見るとあのモンスターがどんな一撃をしたのかわかる。

「この傷跡は、ドリルですか」

そして健はモンスターのほうに振り向く。そして思ったとおりにもンスターの角がグルグルと回っている。

「話してください」

「真田さん。ですがあのモンスターは結構レベルが高いですよ。大丈夫ですか？」

美穂は腹の傷口を押さえて立ち上がる。このデジタルフィールドの傷は血は出てくるが、表面は電子が削られたようになっていて。そのため、人体の傷とは異なっている。この傷はフィールドから出ると直るようになっていて、時間が経たないと次にフィールドに入ったときはその傷を残した状態になってしまう。詳しい情報はすべて自分のDUSから分かるので負傷のときにフィールドに入る人はそうそういない。

「ダメです、真田さん。一旦考えをまとめてみませんか」

「そんなちゃんげなことをしている暇はありませんわ!!」

「真田さん」

美穂はさらにモンスターに近づく。だが、攻撃はすぐに避けられてさらに強力な一撃を横腹に当たってしまう。

「きゃあー!!」

美穂はそのまま壁にぶつかり気絶する。同時に真田丸がもとの状態に戻る。これではもう美穂は戦えない。健一人で何とかするしかない。

「やるしかなさそうですね」

健は美穂のそばに行つて体制を安静にさせる。そしてモンスターを見て立ち上がる。モンスターも健を見ている。だが健はまずその場から離れて構える。しかし美穂とは違い駆け出そうとはしない。

「ゲモオオオオオオ!!」

そして、先に駆け出してきたのはモンスターが先立った。これであのモンスターは短気だというのが分かった。だが、それが分かったとしても相手の動きは変わらない。しかし、健は変わってくれないほうが助かった。

相手の攻撃が変わらないのなら、こっちの避け方を変えればいい。健は体を横にして軽くモンスターの攻撃をかわす。

「ゲモオオオオオ!!」

だが、モンスターは足のローラーですぐにUターン。また健に向かってきた。だがこれも、健の予想通りだ。

健は体を横にして攻撃を避けた後、すぐにモンスターの横腹を狙って思いっきり殴った。モンスターは横に転がっていく。

「ゲモオオオオオオオ！」

モンスターは立ち上がったあと、すぐに角に力を溜めていく。これはあの遠距離攻撃だ。健は走って相手の気を散らす。

「狙いが定めなければ撃てませんよね」

だが、その考えは甘かった。モンスターが射撃したのは集中系の射撃では無く、拡散型の射撃。健はいきなりの攻撃により健は足を止めてしまう。

「ぐあ」

健は腕を顔の前に出してガードする。だが、射撃は足元に行き、健の体制を崩させる。そして同時にモンスターはさらに角に力を溜めてくる。

「やばいですね」

健は立ち上がって駆け出す。だが、モンスターは長い刃をいきなりミサイルのように飛ばしていく。そのせいで健仰向けの状態で動けなくなった。

「う、これは」

完全に攻撃が避けられない状態になってしまった。完全にピンチだ。

思いつきり引つ張つても取れる感じがまったく無い。

「……お兄ちゃん」

その時、外で陽菜はいきなりつぶやきだした。その顔は何かに怯えている顔だった。隣で栞が両方を心配しだす。その瞬間、いきなり陽菜は入り口に手で触ろうとした。

「ダメです陽菜ちゃん」

栞は止めようとしたが、陽菜の行動は変わりはない。陽菜はとうとう入り口のデジタルフィールドに触ってしまった。だが、陽菜はそのまま通り抜けて中に入ってしまった。

「え？」

その光景に栞は驚いた。通常状態のフィールドでも入れないはずなのに、今は緊急状態で触ったら体に電撃を浴びた感じになるはずなのに、それはおろか、簡単に中に入ってしまった。

「ひ、陽菜ちゃん!？」

「お兄ちゃんを」

陽菜の体をプルプルしながら言った。その声はどんどん大きくなっていく。

「お兄ちゃんをいじめないで!!」

その瞬間、陽菜の右手首についていたブレスレットが黒く光りだした。そしてその光は陽菜の手元に来て、棒状の形になった。光は

消えて杖が陽菜の手に合った。

「陽菜ちゃん？」

健の声は聞こえないのか陽菜は杖の上の先に付いている小さい玉をモンスターに杖を向ける。

「Roaring pierced in a straining line」

その瞬間、陽菜の口からある英語の言葉が聞こえた。

「これってたしか」

「OSよね」

OS。それこのデジタルフィールド内で戦う詠唱術と同じものだ。本当はコンピューター内のオペレーティングシステムであるが、この中でも意味は変わりはない。技を使用するために英語で唱えるのだ。だが、普通このOSは一つ一つが強力なものになっているのだ。それを小学生の女の子がたった今発動している。

「フロント・キヤノン【直線に撃ち抜く咆哮】」

陽菜の杖の先から強力な方向が射撃された。モンスターはこの攻撃に気づいたのか、角からの射撃を陽菜に向けてきた。

2つの射撃がぶつかり合っている中、健は引つかかっている歯を取ろうとしていた。いくら強力な術だろうが、使っているのは小6の少女。攻撃のぶつかり合いに勝てる可能性は低い。何とかしても助けに行かなければならない。

「助けなきや。陽菜ちゃんが僕を助けてくれたみたいに」

健は両掌を地面に置いた。そして、一気に力を指先に込めた。次の瞬間、仰向けになっっている健の背中から大きな爆発みたいのが発生した。

「健ちゃん!!」

「五十嵐君」

杏と栞は同時に声を出した。だが、心配する分無駄だった。健はすぐに立ち上がり、モンスター思いつき蹴りだした。その衝撃によりモンスターの攻撃は中断され、横にそれていく。

「君の相手は、この僕です」

息を切らしながら健は言う。あのとときの爆発から体制を整えるのは結構な体力がいるものだった。

「お兄ちゃん。私も戦う」

「無理はしないでくださいね」

「うん」

健の近くに来て陽菜は言った。この状態で断るわけにも行かない。なのでそれだけを言って健はモンスターに視線を合わせた。そして、ボソツと陽菜に聞く。

「陽菜ちゃん。あのモンスターの動きをさっきの術で足止めしてください」

「……うん。分かった」

陽菜は一瞬何かを考えた様子だったが、すぐに了承してくれた。その言葉を聴いて、健は一気にモンスターに向かって駆け出す。

「 Woods of the root related a
nd poked」

陽菜は言われたとおりにOSを唱える。だが、このOSはさっきとは違うものだ。健はそのことに疑問を抱いた瞬間、健の両目があるものを捉えた。それは地面から強力な電波だった。

（いままで良く考えていなかったのですが、もしかしたらこの眼は）

電波を見ることが出来る眼である。健はそのことを一瞬で理解して陽菜がなにをしようとしているのかが少しだけ分かった。

「ナチュラル・トラップ【纏わり突く根っここの森】」

次の瞬間、モンスターの足元から大量の木の根っこが現れてモンスターを捕らえる。地面から離れて完全に根っこに絡まったモンスターは身動きが完全に出来なくなっている。だが、健はそれ以外に少し気になるところがある。

「陽菜ちゃん。これは」

「こっちのほうで足止めできる」

陽菜の一言により、健は少しフツと口元が緩む。これは完全な陽菜のフラインプレーだ。

「行きます」

健は根っこを使って上り、モンスターの場所へと向かう。そして完全に動けない状態のモンスターを殴りだす。

「はああああ！」

そして次々にパンチや蹴りを繰り返す。だが、ただむやみに攻撃しているわけではない。ずっとおんなじ場所を攻撃しているのだ。

「とどめです」

健は左手の指先に思いつきり力を込めた。そして次の瞬間、指から大きな赤い爪が伸びてきたのだ。しかも前よりも大きくなっている。

健は思いつきりその大きな爪をさつきまで一点に狙った傷に向かって思いつきりぶつけた。

「グモオオオオオ！」

モンスターは今までに無い声を上げて攻撃にこらえようとする。だが、もうするがある。なぜならもう一段階の攻撃があるのだから。

「【フラスト・キャン直線に撃ち抜く咆哮】」

次の瞬間、木の根っこは消えてモンスターは落ちていく。その刹那、大きな咆哮がモンスターを包みだす。これは、陽菜のあのときの攻撃。

実は健が攻撃を連発していた理由はもう一つあって。その理由こそが今の攻撃のOSを唱えさせるための時間だったのだ。

健はすぐにその場から離れていたので攻撃は当たっていない。ただ、モンスターはこの攻撃にはもう耐えられないはずである。そのことが当たったのか、もうその場にはモンスターの姿は無く、DELETEの文字のみが残っていた。その文字も後に消えて、デジタルフィールドも消えていった。倒れている美穂の姿も傷などはない。

「五十嵐君」

「健ちゃん!!」

栞が2人に向かって歩き出した瞬間、前に杏が通りかかって健に抱きつこうとする。だが健はなれているのですぐに避けて目線を陽菜に向ける。

「まさか、陽菜ちゃんがこんなにすごい術を使えるなんて思いもしてませんでした」

「私も、ビックリです」

健の一言に栞もうなずく。だが、その後に来た夕日は疑問を感じている顔でこっちにきた。

「五十嵐。この子って、初等部の子よね。なんであんなOSを。いや、あんなDUSを持っているの?」

「それは、残念ながら僕には分かりません。ただ、僕のDUSと似ている。そんな感じはします」

今の健にはそれが一番分かっている答えだった。何も知らないの

に、謎は増えていくだけだった。

「ですが、おかげで助かりました」

健は目線を陽菜に合わせて頭を撫でる。撫でられた陽菜はものすごく気持ちよさそうに微笑んでうんという。本当にうれしそうだ。

「しかし、なんでこんな小さな子があんな術を」

さっきの根っこを出した術。あれは見た目でも強力な術だ。あんな術をサラッと使ってしまう陽菜は、果たして何者なのか。

（まあ、今は考えないようにしましょうか）

全員無事。それが今何よりいいことだ。そして、この眼の可能性。それも分かった。

あの事件が解決し、健たちは改めて下校しようとした。健の周りには栞、陽菜、杏、夕日が付いてくる。あれからクラスの人たちは10組の生徒にある意味勝ったという意味で盛り上がっていた。もちろん健は勝った気もしていないし、盛り上がるうとはしなかった。

「お、来た来た」

校門を通ろうとしたとき、一人の青髪の少年が健に話しかけた。この少年を健は見覚えがあった。いや、見覚えどころではない。彼は1組のクラスメイトだ。名前は伊達港^{だてみなと}。クラスの中でも真面目な男子生徒だ。彼も確かマスターだ。

「どうかしたのですか？」

「いや、ちょっと話がしたくってね。少し時間いいか？」

「かまいません」

買い物は昨日行ったのでこのまま真っ直ぐ帰る気であったただけのこと。健はすぐに了承した。

「そうか。では、改めて自己紹介だ。俺は伊達港。港でいいぜ」

「五十嵐健です」

港のペースを崩すように健は真面目に答える。

「伊達。あんた五十嵐になんの用なの？」

健の後ろから夕日が聞く。そういえば杏と夕日は前から良く話し

ているのを見る。確か中等部からの知り合いだ。

「お前とおんなじさ。こいつに興味が出てきたのさ」

「興味ってあんた。こつち？」

そう言っつて夕日はまるでお嬢様が高笑いするときみたいな手の甲を頬に近づける。

「ちげえよ。普通に友だちとしてだ。いままでこんなやつを忘れていたなんて正直後悔しているぜ」

「まあ、気持ちは分かるわ」

「だろ」

夕日のうなずきに港は言い張る。帰り道は港と夕日がにぎやかで少し楽しめた健であった。だが、彼はまったくしゃべらなかつた。

「五十嵐君」

その時、栞が健に話しかけてきた。その声に健は反応して振り向いた。

「また、メガネをかけたのですか？」

「ええ。この眼は昔ちよつとしたことがありましたので」

そういわれて健は自分の目をメガネ越しに触る。この眼のせいで小さい頃はいじめられていたものだ。今も健はそのことで早速なれた友だちに恐れられるのが嫌だった。もう、遅いと思うが。

「で、ですが。わ、私はその赤い眼、綺麗だと思いますよ」

「そ、そうですが」

いきなり初めてそんなこと言われた健だが、相変わらずのポーカ
ーフェイスなのでまったく照れた様子は無い。

「ありがとうございます。そんなこと言われたの初めてです」

健は素直に笑顔でそう伝えた。その瞬間、逆に栞が少しだけ顔を赤くした。だがその瞬間を健は自分のメガネを取ってみていたので気づいてはいなかった。

次の日の朝。健は朝起きて制服に着替えた後、いつもかけているメガネを持った。だが、かけようとはせず、少し考えていた。それは昨日の戦いとき、健の赤い裸眼は電波を見ることが出来た。そして、さらにはクラスみんなにこの眼を見られてしまった。誰にも見せないために眼の色をメガネで隠していた。もう、これ以上は隠さなくてもいいかも知れない。

『わ、私はその赤い眼、綺麗だと思いますよ』

栞に言われたこの一言。その一言が今健を変えようとしていた。健はすごく長く感じる数秒ぐらいそのメガネを見ていた。そして、そのメガネをそのままケースの中に入れて机の上に置いた。

(少しは自分から変わっていきましょか)

栞が自分の存在を残してくれる。それはとてもありがたいことだ。だが、結局自分は何もしていない。そのことがはっきり分かった。だから、小さいことだろうがやってみる勝ちがある。そして、だが

やはり健を動かしたのはあの栞の一言だ。

「あ、健ちゃん。メガネ外したんだ」

「ええ」

玄関に行くとき杏が待っていてくれた。そしてすぐにメガネを外していないことを聞いてきた。

「うんうん。やっぱり私はそっちのほうがいいな。なんかかっこいいよ。少し髪が長くなっただ感じもするし」

「髪、ですが？」

健は気づいていなかったが、メガネを外したときの健は少し髪が長くなるのだ。つけると直る。まったく不思議なことだ。だが、杏の言とおりにこっちのほうかなにやら似合う。

「ありがとうございます。では、いきあましようか。行ってきます」

「うん。行ってきまーす！」

いつものように健はそう言って扉を開けて、杏はその間に廊下に向かって手を上げていた。

健と杏は学園に登校して自分の教室に入った。杏は夕日たちと速攻で合流。健は自分の席に座った。だが座った瞬間、一人の黒短髪の男が健に話しかけてきた。

「よつ。少しいいか？」

「……………」

だが健は黙った。なんか、この人とは話してはいけない気がするのだ。なんか、変態オーラが強い。

「あ、もしかしたら名前知らないとかか？俺の名前は荒井浩介あらいこうすけだよ。よろしくな」

だが浩介と名乗る人物は聞いてもいないのにいきなり自己紹介をしてきた。ちなみに健は彼の名は知っている。理由はクラスメイトだからだ。

「五十嵐君。おはようございます」

「おはようございます」

「俺は無視かよ!!」

その時、栞がこつちに来て挨拶してきたのを健は返す。そのことに浩介はツツコム。なんか忙しいやつである。

「って、春皆さん」

そして、浩介はそう言っていきなり栞の手を握りだした。いきなりりのことで栞は完全に手間取っている。

「あれ、あなたのこととすと見えます。まずはその白い肌。さらには将来衰えそうにもないその肌、将来が楽しみなその胸!!どれも俺にとっては好物同然です!!」

さらにはなぜか栞を口説き始めた。まあ、完全に栞は恥ずかしがっている。最後の言葉で胸を気にしたが、それは見なかったことにしよう。

「俺は完全にあなたには　ボヘツ！！」

その瞬間、いきなり浩介は倒れ始めた。よく見ると後ろ頭のほうに足跡が見える。振り向くとそこには夕日が立っていた。多分、彼女が浩介の頭を蹴ったのだろう。だがも少し早くしてもいいと思うが。後ろには引きずり笑いをしている杏と呆れている港がいる。

「春皆さん。大丈夫ですか？」

「は、はい」

健は完全に浩介を無視して栞に話しかける。この時でも栞は自分の胸を気にしていた。

「お、俺は無視かよ」

「黙れ。このセクハラ魔人！！春皆さんに何しようとしていたのよ」

倒れながらしゃべる浩介に夕日がツツコム。しかし、ひどいよいよだ。触ったのは手だけでこれだけではセクハラとは言わないだろうか。まあ、口説きはしていたが。

「確かに胸は触ろうとしたが！！」

「はつきりと白状するな！！」

前言撤回、セクハラ魔人だと健も納得した。浩介は思いっきり夕日に顔を踏まれる。なんだろう、なんかうれしそうな顔をしている気がする。いや、完全にしている。Mなのか、Mのド変態なのか。

「なにニヤニヤしているのよ」

「いや、ここからだど水色の布切れが良く見れ　ドガスツ！！」

「変態、一生寝てる!!」

どうやら浩介は踏まれている最中、夕日のスカートの中を見ていたようだ。だから喜んでいたのか。まあ、この後命はあるのか分からないが、とりあえず顔面はモザイクものだろう。

「そういえば、五十嵐。あんたメガネ外したの？」

「ええ」

「あ、本当です」

夕日の一言により、栞は健がメガネを取っていることにやっと気づいた。実際、栞は浩介のせいであり健の顔が見れなかったので仕方がないと思うが。

「そ、そつちのほうがなんかかっこいいわね」

「ん？なにが言いましたか」

「な、なんでもないわよ」

夕日は小さい声でつぶやいたので健にはうまく聞こえなかった。

「あれ？もしかしてお前、五十嵐に気があるのか？」

「だ、黙れ!!」

「グハア!!」

冷やかして夕日にそう言った浩介だが、見事な夕日のツッコミとパンチがお見舞いされた。浩介はそのまま椅子からバランスを崩して落ちる。

「夕日？」

「な、なんでもないわよ!!」

完全に顔を赤くして夕日は健に言う。だが健は何も気にしてはいなかった。

「しかし、昨日はつけていたのになんで今日は外したんだ？」

話を戻して港が健に聞いてくる。夕日も隣でうんうんとうなずいている。ちなみに気絶しているのか、浩介がまったく動かない。それを見た健はそっと思っておこうと思った。

「まあ、春皆さんの一言で少しですね。外してもいいかなと思ったのですよ。過去の自分をずっと思い返してばかりではダメだとも気づきましたし」

「ふ〜ん。まあ、隠しているって事は何か嫌なことが当たって事ですよ。深くは聞かないわ」

「まあな、俺もそういうことあるしな。葉柱に賛成だな」

夕日は満足して、港はそんな夕日の意見に賛成した。その時、S HRが始まるチャイムが鳴り響いた。みんなそれぞれ言葉を交わしながら自分の席に戻っていく。そんな中、いまだに浩介は動こうともしない。

(邪魔ですね)

とりあえずは、教室に入ってきた先生はそんな顔をしていた。

昼休み、健は自分の机の上で弁当を開ける。だが、いつもとは違う光景が目の前にあった。健の前には一緒に弁当をあけている栞が

いた。そして横には杏もいた。

「お、集まっているようだな」

「ねえ、横の机開いているから並べよ」

そして購買の袋を持った港と夕日がこっちにきた。そして夕日はすぐに開いている横の机をこっちに持ってくる。健はそれを見て自分の机をその机に近づける。小さなやさしさであった。

「しかし、あんたたち、弁当の中身一緒ね」

夕日が健と杏の弁当の中身を見てそう聞く。まあ、誰もがそう思うことだ。

「これ、健ちゃんが作ってくれたの。それも毎日」

杏はまるで自分のことのように言い張る。

「へえ、料理得意なの？」

「僕、家で家事全般ある理由で引き受けていますので」

「はあ、なるほど」

「じゃあ、じゃあ、一口ちよつと頂戴」

「うん。おいしいよ」

港は納得し、夕日は杏の弁当箱の食べ物を一つ摘む。そして口にはお張る。その瞬間、夕日はまるで体に電撃が走ったように体を震えさせた。

「お、おいしいわ。これ。あんた店なんかやってるの？」

「いいえ」

「これ、お金取れるレベルよ。すごくおいしい」

ものすごく歓迎している夕日を見てなんか栞はなんか食べたそうな顔を見ていた。その表情を見た健は自分の弁当を栞に近づけた。

「春皆さんもお一つどうですか？自身はありませんが」

「で、でも私なんかに大切なご飯を」

「でしたら交換しましょうか一品ずつ。それならどうでしょうか」
「そ、それなら。あ、ありがとうございます」

栞は一回健にお礼を言った後、かわいらしい笑顔を向けてくれた。それにつられて健も自然に笑顔が出る。その顔を夕日たちは不思議そうに見ていた。健はその視線は気づいた。

「どうかしたのですか？」

「いや、あんたってちゃんと笑うんだね」

「どういうことですか？」

「なんか、無愛想な人かと思ったのよ。でも、何年間も杏の幼馴染をしているから良く考えたらそんなこと無いと言つのは明白よね」

「あれ？今なんか私、ひどいこと言われたような気がするけど」

杏の一言に健は愛想笑いで返す。だが確かに健は今まで微笑んだことは少ない。だが、決してしていないことではない。杏と幼馴染ではすきでも無愛想にもなれない。そういうこともあったが。健はただ単に人とかかわりが少なかったからそう思われることがあるか、けっして無愛想ではない。

「では、なにがいいですか？」

「そ、そんな。五十嵐君の好きなのでいいです」

「では、これを」

そういいあって栞と健はお互いに弁当のおかずを交換してほお張る。

「あ、春皆さん。これおいしいですよ」

「あ、は、はい。良かったです。家族以外の人に食べてもらったの初めてで」

「じゃあ、これしおちゃんが作ったの？」

健と栞の会話を聞いて杏が聞いてくる。ちなみに「しおちゃん」とは杏が勝手に作った栞のあだ名である。

「そうなんですか。うん。おいしいですね」

「ありがとうございます。五十嵐君のもすごくおいしいです」
「それは光栄です」

またお互いに微笑み合う。だがそれを邪魔するように浩介がいきなり健の肩を腕で組んできた。

「お前、なに春皆さんの作ったものを食べてんだよ！ー！うらやましーなコノヤロー！ー！」

「知りませんよ」

そう言って健は浩介の腕を振り払う。その時、いきなり携帯の電話が振るえ始めた。マナーモードにしているので着メロはならない。

「誰から？」

「学園長です」

そう言って健はメールの内容を確認する。そして栞に一言伝えて

違う番号で電話を始める。

「春皆さん。食べ終わったら学園長室に行きますよ。陽菜ちゃんには僕が伝えますので」

「は、はい」

そう、メールの内容は智子の呼び出しのことだった。

健たちは食事を終えた後、陽菜と集合して学園長室にきた。いつもどおりノックをして智子の「どうぞ」と言う声を聞いて扉を開けて中にはいる。いつもと変わらない空間の中に、少し長い客人用テーブルの上にはいままで見られなかったお菓子とお茶が置かれていた。

「どうしたのですか？お菓子なんて」

「まあ、君たちは私の常連の客となったからね。すこしのおもてなしだ」

「昨日のことですか」

「ギクッ！！！」

健の言葉に見事に分かりやすい言葉を智子は言ってきた。どう見ても凶星のようだ。

「まあ、そのことはいいですよ。おかげで陽菜ちゃんのお菓子を見られましたので」

「ほお、陽菜ちゃん。良く戦えたわね」

智子の言葉に陽菜はお菓子を食べながら少し顔を赤くしてうなずく。多分、すでにお菓子を食べてしまっていることを恥ずかしく思っているのだろうか。まあ、小学6年なので当たり前のことだろうが。

「それって、なにか戦えない理由でもあったのですか？」

「この子、あまりDUSを使いたくなかったのよ。でも、昨日は使ったのでしょ」

智子の言葉に陽菜はまたお菓子を食べながらうなずく。なんか夕
イミングが合わないように見える。

「まあ、小学生の女の子ですからね。深くは聞きません。僕が深
く聞きたいのは呼び出した内容です」

「あ、そうそう。実はね。あなたたちには生徒会に入ってほしい
のよ。それも第一生徒会に」

「生徒会ですか」

第七電洗学園生徒会はマスターを持つ人しかねない。つまりほ
とんどが高等部の10組と11組の生徒である。それだとたくさん
いるということまで3つに分かれている。まず男女混合の第一生徒会。
男子のみの第二生徒会。そして女子のみの第三生徒会。5月中それ
ぞれ好きなのところに移動が可能である。だから新しくマスターにな
った健たちも入る権利は持つ。

「ですが、僕たちは学園長が免除してくれたのでは？」

「それがね、最近第一生徒会が少なくなってきたのよ。それ
も10人も満たないくらいで。そして5月の今、抜けてしまう人も
いるかもしれないのよ。それで仲がいいあんたたちに入ってもらお
うと思ったのよ」

「まあ、人数が少ないと行事とかで問題が発生しますからね」

この学園の生徒会が3つに分かれている理由はもう一つある。そ
れは競わせるためだ。簡単に言えば体育祭や文化祭などで競わせる。
ほかにもあつてほとんどが生徒会を競わせるものだ。

「学園長として、それは見逃せないからね。もちろん嫌だったら
断ってもいいけど」

「分かりました」

智子の言葉に健は即答した。

「五十嵐君がやるなら私もやります」

「お兄ちゃん。私もがんばる」

「二人とも」

「ありがとね、三人とも。せっかくだけど、今日の放課後集まりがあるから行ってね。場所は会議室だから」

智子は笑顔になって言ってきた。なにがともあれ、健が生徒会室に入るといったとき、彼は何も考えてはいなかった。やはりお人よしだ。

学園長室を後にした健と栞は陽菜を送っていった後、教室に戻ってきた。だが教室の扉を開けた瞬間、浩介と港がこっちにやってきた。だが浩介の表情がなぜかとても怒っている顔だった。

「どうかしたのですか？」

「おお、健。実はな」

「あいつら、五十嵐のことを無い存在にしやがって」

港の言葉をさえぎるようにイラつきながら浩介はつぶやく。これは健がなにか絡んでいるかもしれない。

「ほかの男子がな、健のことを見えていなかったらしくな、さっきの食事のとき、ずっと誰もいない席でなに食ってたんだ。ってバカにされてな、こいつが喧嘩までに発展させようだったから退場させ

ていたところだ」

「だってあいつら、五十嵐の席を幽霊の席だって言うんだぜ、クラスメイトの癖に」

「まあ、その気持ちは分かる。だが、考えてみるよ。俺たちもいままで忘れていたんだぞ」

「……。そうか。スマン。五十嵐もな」

冷静を取り戻した浩介は素直に謝った。この言葉は確かだ。この二人も昨日までは健の存在に気が付かなかっただろう。

「健もすまないな。嫌なことだろう」

「いいえ。僕はなれていきますから。それよりも先生がもう来そうです。席に戻りましょう」

そう言って健と後ろについていく栞は教室の中に入っていった。今の健の言葉には一切の偽りはない。今まで何回こんなことがあったのだろうかもう数え切れないほどだ。もう中学のときに慣れてしまっている。

「なあ、伊達」

「なんだ？」

「あいつ、大人だな」

「……お前が子供なだけだ」

「どういうことだ」

「だが、あいつが大人に見えるのは同感だ」

「俺が子供なのは同感しないぞ」

そういう会話をしてから二人も健の後に続いて教室に入る。

放課後になり、健たちは会議室へと来た。ちなみに栞と陽菜以外に夕日と港も一緒にいる。二人ともマスターなのでこの会議に出るのだ。

会議室の扉を開けたとき、まるで別の空間を見ているような感覚になった。そう、それぐらい広い場所なのだ見ただけで教室の4倍ぐらいあるかもしれない。まあ、さすがに体育館や運動場よりは大きくは無い。

「じゃあ、俺は第二だからな」

「私も第三だから」

「ええ」

そうやって二人は別々の生徒会の場所に行った。健たちは周りを見渡して第一生徒会が集まっている場所を探す。だが、その場所は人数が少ないとこですぐに分かった。

「あ、あの」

健はその場所に言って声をかけた。だが、みんな反応しない。それを見た栞が健の代わりに声をかける。その声はものすごく緊張していた感じだった。

「あ、あなたね。会長から話は聞いたわよ」

そうやって一人の女子生徒がそう言い出す。裾のボタンの色が青なので2年生だろう。

「それで、2人だけ？会長からは三人って聞いたのだけど」

「えっと、それが」
「あれ？どうしたの晶？」

栞が言おうとした瞬間、一人の女子生徒が話しかけてきた。こちらも青のボタンだから二年生だろう。

「あ、学園長が言っていた三人来たんだ？」
「何言っているのよ愛理女の子二人じゃないのしかもかわいいし」
「そっちが何言っているのよ、隣に男の子がいるじゃない」
「男？」

愛理といわれる人はどうやら健のことが見ているらしい。会話でそういうのは分かる。だが晶という人はまったく見えていないようだ。

「あ、あの。こ、ここは良く見てください」

栞は完全に緊張してる声で晶に言った。晶は栞に言われたとおり健がいる場所をじっと見つめた。

「わっ！..！」

数十秒後、健のことが見えたのか、晶は驚いたように声を上げる。一番近くにいた健だが、なれているのか驚きはしなかった。

「き、君が三人目か。一体どこに隠れていたの？」
「いえ、ずっとここにいました」
「うん。いたよ。だから私が言ったのじゃないの」
「僕は良く存在を忘れられるので、気にしないでいいですよ」

そんなことを言われて晶はさらに申し訳ない顔になった。しかし、健たちにとっては見えている人がいるほうが驚きた。

「君が五十嵐健君で、そっちが春皆菜ちゃんで。そっちの初等部の子が日高陽菜ちゃんね。私は第一生徒会の如月愛理きんづきあいり」

「よろしくです」

やはりこの人が生徒会長だった。健たちは礼儀正しく礼をした。

「本当に少ないのですね。見た限り5人ぐらいですか。会長を入れて男子二人に女子三人。しかも全員2年生ですか」

「そうなのよ。だから君たちが入ってきてくれて本当に助かったわ」

そんな会話をしている間に、学園長である智子とほかの先生方が次々に会議室に入ってきた。とうとう全体生徒会が始まる。

「では、まず確認からいたしましょう。第一生徒会」

マイクを持ってしゃべっているのはメガネをかけた黒短髪の男、秋元先生あきもと。ちなみに高等部で政経を担当している。先生に呼ばれて愛理は立ち上がる。

「まず、第一生徒会ではその女子二名。っと、男子一名」

最初は女子だけを言いそうだったが、智子に睨まれた後、思い出したのかそう言った。まあ、これも想定内のことだ。

「はい」

「では、今日はこのまま変わらないということだ」

「先生待ってください」

秋元がそう言おうとした時、晶がいきなり手を上げながら立ち上がった。

「なんですか？」

「先生。私、第一生徒会をやめて第三生徒会に入ります」

「じゃ、じゃあ私も」

「俺は第二生徒会に」

晶が発した言葉により、第一生徒会のメンバーは次々に立ち上がってそう言ってきた。そしてついに立ち上がっていないのは健たち三人になってしまった。

「晶、あなた」

「愛理。やはり私はあなたに協力できない」

「この期間中、変えるのは自由だ。変えると言っなら席を移動しろ」

「はい」

そう言って立ち上がった愛理以外の生徒はすべて別の生徒会の席に座ってしまった。愛理はなにが起こったのかわからないのか。そのまま立ちすごしていた。

「如月。座れ」

「あ、は、はい」

我を取り戻した愛理は急いで返事をしてその場の椅子に座った。だが、同様は完全に隠せてはいない。

「それで、去年も話していた案、この学園のBランク以下の退学という話はまだ決着着いていないようだが」

え！？

健はこの時、自分の耳を疑った。だが、これは真実だ。退学という言葉はしかも、ランクがB以下の生徒ということは初等部や中等部の人たちは一体。

「本当は高等部の10、11組だけでいいのだがな」

そして腕を組みながら足を机の上に乗せている、第二生徒会会長、あおやましゅんじ青山俊吾はいきなりそんなことを言ってきた。

「何言ってますの？奴隷は必要ですわ」

そして第三生徒会会長、さんぜんいんみなこ三千院美奈子はそう言ってきた。だが、言い方に完全に毒が入っている。

「お前バカか。あんなやつらうざくつてしかたねえんだよ！！」
「知らないのですか？ザコの男ほどわたくしにもすぐくあほみたいに尽くしてくるのですわよ。わたくしはそれを見るのが楽しくって楽しくって」

完全に会話は一般性とをバカにしているようにしか聞こえない。健はそのことを我慢できなかった。だが、今自分がここで叫んだとしても誰も声が届かない。栞は口を手で押さえて驚いて陽菜は怖がっていた。

「初等部のやつらは別にいいが、まあ高等部上がる頃にはB以下

は退学だな。強制」

「まあ、あまりザコ過ぎてモね」

「ちよっと、話は終わってないわよ!!」

その時、愛理がいきなり立ち上がって叫びだした。

「その話、まだ第一生徒会は了承していません。私たちはその話には反対です」

「とは言ってもな、もう一人だけでなに出来る。あ、もう2人入ったか。だがそいつらももう変えるだろ。なあ、お嬢さん方」

だが、二人は俊吾の言葉に首を一切振らない。まるで銅像のように固まっている。それぐらいショックだったのだろう。

「あれ？もう一人はどこに行ったのですが？もう怖くって帰っちゃったのですかね」

そのあと、美奈子も悪ふざけのように言ってくる。

「ふざけないで!!五十嵐君たちはどうなの?」

「はあ、お前、誰だよそれ」

まだ誰も健のことが見えていないのか笑ってくる。だが、それよりも健は退学と言う言葉に頭にきていた。だが、言葉は通じない。そう思った健は自分の肩の上に乗っているクキユウをいきなりつかみ出した。そしてそのまま思いつき俊吾にめがけて投げ出した。

「きゅうううううう!!」

「な、なんだ!?!」

いきなり出てきた黄色い物体に俊吾は驚きを隠せなかった。そして思いつきりクキユウの頭突きを見事に食らう。

「い、五十嵐君？」

「如月さん。後で話を良く聞かせてください」

「え？」

「僕は、この人たちを許せません。僕が影だとしても」

「じゃあ、このまま残ってくれるの？」

「もちろんです。抜けていってしまった人の分までがんばります」

健の言葉に愛理はうれしかったのかいきなり健に抱きついてきた。

「き、如月さん!？」

「ありがとう。本当に」

「では、今回の会議はここまでだ」

「ちよつと待てよ!！」

秋元が終わらせようとしたとき、いきなり俊吾がクキユウをつかみながら怒鳴ってきた。

「てめえか、こんなものを投げたやつは!!!これはこの俺様に戦線布告と考えていいのか?いいんだな!！」

健は何も言っていないのに完全に俊吾は一人で話を進めている。途中、クキユウをテキストに投げたことはこの際気にしない。

「勝負だ。第一生徒会、第二生徒会のな。勝負は5対5のビルステージだ!もちろん戦えなかったり棄権したそのとき、第一生徒会は解散してもらおう!！」

「え!？」

「な!？」

「もちろん異論はなしだ!！」

完全に自分勝手な言葉で勝手に第一生徒会を解散の危機に追い込んだ俊吾。

「ちょうど今回の会議は第一生徒会をどうすることだったんだよ。だから、この戦いには先行どもにも了承してもらおう。勝負は明後日だ。では解散!！」

そう言っただけで俊吾はさっさと会議室を出て行った。ほかの生徒も次々に出て行く。その中、健は港の姿を見つけた。

「港」

だが、港は健をちょっと見ただけでそのまま去っていった。

「では、わたくしたちは鑑賞させていただきますわね。どうかあがいてくださいます。おほほほほ」

高笑いしながら、美奈子も会議室を出て行った。同時に生徒たちも出て行く。もちろんその中で健は夕日の姿を見た。夕日もこちらを見たがすぐに去って行った。

「みんな。何でこんなことに」

「ごめんなさい。私のせいで」

「会長」

先生たちも会議室を出、結局その場に残ったのは健たち4人だった。栞と陽菜は何とかここにいてくれた。

「二人とも。いいのですね」

「わ、私。ああいう人。嫌です。だから私も戦います。役に立たないかもしれないけど」

「お兄ちゃん。私あの人たち許せない!!」

「ありがとうございます」

「会長。とにかく僕たちは人数を集めないといけないみたいです」

そう。とにかく今は戦うしかない。そのためにはあと一人、役員を集めなければならぬ。だが、日にちは今日を抜いて明日のみと考えるも悪い。明後日には戦いでそんなことをしている時間は無いだろう。

「そうよね。では早速いきましょ」

そうやって空元気のように愛理は立ち上がって会議室を出て行く。だが、やはり足元はふらふらしている。健は即座に愛理を支えて会議室から出る手助けをする。だがドアを開けたとき、ある人物がその場にいた。

「やあ、五十嵐」

「葉柱さん」

そう、その場にいたのは夕日だった。しかもなんかすっきりしている顔をしている。

「私、第三生徒会、抜けてきちゃった」

「葉柱さん」

「だから、こっちの生徒会に入れて。これで人数がそろおうと思うし」

「あ、ありがとうございます。葉柱さん。会長、人数そろいましたよ」

「え、ほ、本当？」

愛理はまるでさっきの音が聞いていなかったように返ってくる。はやり、ショックがでかいのだろう。

「本当です。よろしくお願いします」

「よ、よろしく」

その瞬間、愛理はいきなり泣き出した。多分、我慢していたのがあふれてきたのだろう。

「如月さん」

足元が崩れた愛理を健がすぐに支える。愛理はそのまま健に抱きだした。

「葉柱さん。本当にありがとうございます」

「いいのよ。私だってああいうの許せなかった。大体あんなことをしたら、杏が危ないじゃない」

「そうですね」

こうしてとりあえず人数はそろった。後は、戦うのみとなった。

そして日は経ち2日後の放課後。校庭には巨大なデジタルフィールドが出来ている。そしてその中には巨大なビルが聳え立っていた。

今回の第一生徒会と第二生徒会による五対五で、バトル内容はビルステージとなっている。ビルステージとはこの大きなビルに入っ
て戦うことである。

そしてお互い、メンバーを引き連れて現れた。

「ほほう。どうやらメンバーは集まらなかったようだな。しかも女子しかいないとはな」

第二生徒会会長の俊吾は五人いるはずなのだが、どうやらまだ健のことが見えていないらしく、彼には四人しか見えない。

「会長。ちゃんといますよ。男子が一人」

「え、あ、てかこいつが俺を怒らせたんだったな」

隣にいる港の言葉により、俊吾は思い出してやっと健を見ることが出来た。まあ、これでちゃんとした戦いにはなるだろう。

「健。俺は本気で行くぞ」

「お手柔らかにお願いします」

そう言って二人は握手をした。昨日、健は港から話を聞いた。どうやら彼は何かの縁により、如月家を敵視しなければならぬみたいなのだ。家柄のことなので何にも言うことが出来ないらしいが、

健はそのことは少し疑問に感じていた。それはなぜ、特別な家柄でもない二人がそんなことになっているのかだ。会長である愛理のクラスは6組。つまり、貴族のクラスではない。同時に港は健と同じクラスだ。なのに家柄の問題があるということは、それぐらい大切なことだろう。

「では、今から第一生徒会と第二生徒会の戦いを始める。疑問もしくはルールの改善を要求したいものは拳手せよ」

「じゃあ、ハイ」

秋元が皆にそう伝えた後、すぐに夕日が手を上げた。

「じゃあ、ルールの改善で、大将戦のルールを付け加えてほしいです」

「それは第一生徒会全員の意見か？」

「はい」

夕日の言葉の後、秋元は愛理に問う。もちろん、愛理は返事をする。実はこの考えは健のものだが、健では拳手しても気づかれないうから前に話して夕日が説明すると決めていたのだ。

「第二生徒会は！？」

「いいだろう。だが大将は会長というルールでいいな」

「もちろんです」

俊吾の言葉に愛理が返す。もちろんそのことははじめから決めていたことで異論は無い。

「では、改めて第一生徒会と第二生徒会のビルステージでの五対五の大将戦を始める！！お互い、礼！！」

秋元の号令により、全員礼をする。そしてお互い別の入り口でスタートする。第一生徒会は東側だ。

「作戦はこれでいいのね。健くん」

「はい。お願いします」

愛理の言葉で健はうなづく。すべてのルールは決まり、こっちの作戦の第一段階が終了した。あとは、相手の出かたしだいだ。

「では、初めてください!」

ブーーーーー! ! ! ! !

戦闘の合図のブザーと共に、健たちはビルの中に二手に分かれて入っていった。北側には健、栞、陽菜ペア。南側には愛理、夕日に分かれた。

「ですが五十嵐君。大将の如月さんを葉柱さんと二人だけでいいのですか? もしものことがあったら」

「だから、この作戦なんですよ。それに、僕は忘れられますが、人を覚えることは出来ません。もちろん、如月さんの実力も知っています」

如月愛理。その名前を聞いたとき、健はこの作戦を即座に経てた。もしかしたら、この作戦は彼女がいるから実行できる作戦かもしれない。

数分経ち、健たちは慎重に動くようになっていた。数分経った今、うかつに動くのは危険だ。このビルの中の戦い。先制攻撃が勝利の鍵になるかもしれない。それにいつトラップが襲いかかってきてもおかしくは無い。

「陽菜ちゃん大丈夫ですか？」

「う、うん。大丈夫」

はつきり言っただけで小学生にとってこの緊張感は重いものだろう。

「お兄ちゃん。私のことは気にしないで。自分から戦うって言うから」

「陽菜ちゃん」

そう、実は健は陽菜を戦わせないつもりだった。理由は簡単、やはり年齢の問題だ。小学生が高校生と対峙することにプレッシャーも感じてしまうだろう。単なる年齢ごとだと思いが、それはそれで過酷なものだ。もちろん相手は相手だ小学生に攻撃にくいだろう。だが、健たちは陽菜を盾にする気はまったく無い。

「……なにか来ます」

「え？」

その瞬間、陽菜の頭上からいきなり上の階から天上が崩れてきた。健をそれをすぐ見て急いで陽菜の近くに駆け出す。

「陽菜ちゃん」

「お兄ちゃん」

「五十嵐君、陽菜ちゃん」

同時に栞はすぐに髪飾りのDUS、エンジェル・ディスク【天使の円盤】を発動する。だが間に合わず、健は陽菜を抱えて瓦礫に埋もれてしまった。

その頃、愛理と夕日はすでに第二生徒会のメンバー二人と接触していた。その中に、港と俊吾の姿は無い。

「お、ここで出会っちゃうとはな!!」

「ここで倒せば俺たちは超有名人だぜ!!」

男子生徒の叫びに愛理と夕日は黙って聞いていた。

「あかがみかい赤神海、行ぐぜ、発動!!」

海の手首のガントレットが発動し巨大な健になる。

「ごしのあやゆかり柊洋介、あんたの首を取る!! 発動!!」

そして洋介はブレスレットから細長い銃が発動される。

「・アローあんたたちみたいにあほなやつに相手できるかしらラッシュ・オン【乱集射の弓矢】、発動!!」

夕日がそう言ったときネックレスから光が出て手元に移り、光が消えたと同時に水色の弓矢が登場する。これが夕日のDUSだ。

「容赦はしないわよ。発動、サウダー・スティック【電撃ノ棒】!!」

愛理の指の指輪から出てきた光はそのまま棒状になって手元に残

った。そして、その棒には電気はビリビリと小さく流れていた。

「行くぜ!!」

「おうよ!!」

こつちに来た海の大剣を愛理が棒で受け止める。だがやはり男女の力の違いが出てくる。だが、愛理にはそのこともちゃんと計算に入れている。

「私の力に、触れたわね」

その瞬間、海は何かの痺れを感じた。そしてその痺れは完全に愛理の棒から来ている。それが分かった海は大剣を離して逃げようとする。

「もう遅いわ」

大剣が離れた瞬間、愛理は頭上で棒を回し始めた。その周りからはだんだん電気が走ってきている。

「準備満タン」

愛理はそう言ってすぐに海に近づく。それを見た洋介はすぐに銃口を愛理に向けて援護をしようとする。だが、愛理の近くには仲間がいる。引き金を引く瞬間、その手に向かっていきなり矢が飛んできた。

「そつはさせないわよ」

「貴様!!」

「残念!!」

そう言って洋介は銃口を改めて夕日に向ける。だが、夕日はすでに矢を放つ準備が出来ている状態である。そのまま洋介が引き金を引く前の矢を冷静に放った。

矢は洋介の足元に落ちた。だが、落ちたのは1本ではなく、5本ぐらいはその周りに刺さっている。まるで何かの準備のように。

「凍って、フリーズ・ボール【氷の柱】！！」

その瞬間、矢がいきなり冷機を上げ、そのまま氷の柱となって銃と腕を凍らす。これで洋介は何も出来なくなった。さっきの矢を外したのはこの技を使用するためだ。

「こ、こんな氷」

「無駄よ。DUSが封じられたあなたにそれは溶けないわよ」

「くそっ、柎！！」

「余所見はしないほうがいいわよ」

海が洋介のほうを見た瞬間、愛理は海の懐へ迫ってきた。海の武器の大剣ではこの距離は戦いにくい。大剣はいわゆる中距離型の防御兵器である。

愛理は一瞬のうちに斜めに思いつきり海の体を切り裂いた。同時に海のHPが速攻で減らされていく。

愛理の武器は棒。だが、属性の電気を先に刃とすれば、切り裂くことは可能である。

その後、愛理はすぐに海から遠ざけて棒は横でまるで銃を持つ形

にした。そしてその前の先端から電気の球が集まり、一瞬で放つ。海はそのままその弾を喰らい、後ろに下がって壁に激突する。その瞬間、海のHPが0になり、先頭不能とされた。

団体戦では、HPが0になったものはDUSの使用が禁止され、この中では発動が出来なくなるのだ。だが、人はその場に残り、戦いが終わるまで出れない。

「さて、次はそいつね」

「へ!？」

そう言って愛理は洋介のほうに振り向く。もちろん洋介はいい気はしなかった。

瓦礫の中、陽菜はつぶっていた眼を開けた。そこには健の顔が暗いところからでも良く見えた。

「お兄ちゃん」

「あ、大丈夫ですか。陽菜ちゃん」

その時、陽菜は分かった。今、ここがどこか。そして今、どういう状況かを。

「お、お兄ちゃん。上から瓦礫が落ちてきたけど」

「それは大丈夫です。どうやら僕たちは春皆さんが作った結界の中にいますから」

そう。実は栞が健が陽菜を抱えた瞬間、緊急的に範囲型の結界を

健たちの周りに作ったのだ。そのため、健たちは怪我一つなく、無事である。だが、同時に健たちはここから出れない状況でもある。

「どうします？五十嵐君」

「……やってみますか。開放します」

栞の言葉を聞いたあと、健は何かを思った後、即座に自分の両手首についているリストバンドと同じ形をしている黒と赤のガンツレツト型の自らのDUS、ブラックヘルム・アーマー【黒服の鎧】を発動する。

「春皆さん。僕がいいと言ったときに結界を解いて下さい」

そう栞に伝えた後、健は左手から爪を出して力を溜める。健は右利きだが、なぜか腕力と握力は左手のほうが強い。だが、元から体の力が弱いのでこれでやっと男子と競えるぐらいの力だ。まあ、それぐらい右腕の力はないと言ってもいい。

「やはり、うまく力を込めますと爪は大きくなり、破壊力を増しますね」

健は自分の爪を見てそうつぶやいた。最初発動したときにはこれを無意識に実行していた。だが、今は違う。

「春皆さん。お願いします」

「はい」

栞の耳に健の言葉が届き、すぐに結界を解除する。もちろん瓦礫は落ちていく。だが、落ちてくる前に、健はすぐに左腕を瓦礫に向かって伸ばした。

「エンド・エッジ【最後の爪】」

その瞬間、瓦礫の中から大きな爪が出てきて、一気に切り裂く。その中から健と陽菜が出てくる。

「何とか成功しました」

「それは良かったな」

健がほっとしたような顔をしたとき、上から声が出てきた。この声は知らない人の声だ。

「知らない人と、港ですか」

「知らない人って失礼だな!!」

「まあ、健にとってはそうだろうな」

「否定なしかよ!!」

そう。上には知らない人と港が立っていた。その後二人は下に落ちてきた。

「行くぜ、ウォールクラッシュ・ランス【壁を貫く槍】発動!!」

港の指輪のDUSが光、そのまま巨大な槍と化した。美穂とは違い、速さよりも攻撃力を中心とする武器だろう。

「俺の名はさいかてつま雑賀哲馬だ。ファイア・ランブル【火炎祭りの銃】発動!!」

哲馬のネックレスが光手元にまるで戦国時代の火縄銃の形となった。

「お兄ちゃん。私もやる。マジックステッキ【魔法の杖】発動」

陽菜はそれを見てすぐにDUSを発動する。

「手加減はしないぜ。健」

「それは、違いますよ。港」

自信満々に行ってくる港とは裏腹に健はなんか好戦的ではなかった。まるで、何かを待っている感じだった。

「春皆さん、陽菜ちゃん。作戦実行です」

健がそう言った瞬間、栞と陽菜は横の道に向かっていきなり走り出した。同時に健も二人を追うように走っていく。

「あ、逃げるのか!？」

「お兄ちゃん。これでいいの?」

「ええ。戦略的撤退です。あの二人の実力で戦いになれていない僕たち三人ではきつと勝てないでしょうから」

健はとりあえず逃げることを指示した。もちろん向かう先も決まっている。

しばらく追いかけてっこしている最中、ついに哲馬のイライラが爆発したのか銃口を健たちに向けた。

「あゝくそ!!!このまま撃つてやる!!!!!!」

そう言って哲馬は引き金を引いた。だがその瞬間、氷矢がいきなり健たちを避けて哲馬に向かって放たれた。そのまま哲馬が撃った弾丸はその矢と相殺になった。だがこの時、港はその場から止まっ

た。

「お、伊達。どうした？」

「おい、雑賀。どうやら俺たちはハメられたらしいぞ」

「罨か、どこだ！！」

「違う。さっきの矢は葉柱のものだ」

「なっ！！」

そう言っつて哲馬は健たちがいた方向を見る。そこにはなんと第一生徒会が全員集合している。

「い、いつの間に！！」

「簡単な話です」

哲馬の言葉に健が話をする。どうやら戦闘中は全員健の姿は見えてるらしい。

「僕たちが最初分かれたのはあなたたちの戦力を分散させるためです。如月さんたちはその分散された人を倒し、そして僕たちの目的はあらかじめ逃げる、もとい、時間稼ぎでした」

「そうか。お前らはハナツから合流する作戦だったか。だがそれは俺たちが最初から分散する作戦だったことが分かっていた言い方だが」

健の言葉に港が対抗する。確かにこの作戦を実行するためには相手の動きを予想していなければならない。簡単に言えば山勘と変わらない。

「いいえ。このビルステージを選んだのはあなたたちです。この中で有効な戦い方は分散する。そして大将戦ならその大将を表に

出さないほうがいいと、いうことです」

「なるほど、だからお前らはわざと大将戦を希望したのか」

健の言葉を港は理解する。だが隣の哲馬はまったく分かっていない顔をしている。ちなみにあの瓦礫崩れは健たちにとっては良そうにも無い利点だったわけだ。

「すべて、お前の作戦通りか」

「まあ、自軍を有利にさせるのは基本ですから」

「だが、その作戦。この俺が来たら意味無いだろ」

その時、港たちの後ろから俊吾が現れる。

「それも予想通りです。二人減ればさすがに大将が出てくると思っ
てましたから」

「あいつ、影薄いくせに、頭良すぎるだろ」

「やはり面白いやつだな。だが、これで作戦は終わりだろ」

そう言っ
て港は改めて槍を構える。そして全員改めて武器を構える。

「燃えるぜ【炎鋼鞭】^{フレイドル}発動!!」

俊吾の制服のブレザーについているバッチが光、そのまま手元に鞭の形になって手に残った。この鞭が俊吾のDUSだ。その名とおり炎の鞭だ。

「あっちの会長は任せて」

「陽菜ちゃん春皆さんは後ろへ。行きますよ葉柱さん」

「もちろん」

愛理が俊吾の前に行き、陽菜と栞は後ろに下がって夕日が前に出る。これは一対一と四対二の構図だ。

「ふん、なめられたものだな」

そう言って哲馬が一番弱そうな陽菜を狙って射撃をした。この状態で必ず健とかがかばいに来るだろうと思ったのだろうが、健は港に向かって駆け出していた。

「なっ!!」

「やはりね」

夕日はそうつぶやいて港のところ弓矢を向ける。そして、陽菜に向かった弾丸は陽菜の目の前に消え去っていく。

「な、こいつらの相手ってまさか」

そう。ここは四対二ではなく、二対一と二対一の構図である。しかも哲馬の相手は栞と陽菜となるのだ。

「なめられたものだな!!」

そう言って哲馬は陽菜に向かって弾丸を乱射する。だが陽菜の前で弾丸は消え去っていく。

「こ、この程度の射撃なら技は unnecessary です」

そう。実は栞の DUS、【天使の円盤】エンジェル・ディスクは特殊能力があり、最低限の小さい攻撃は栞が指示すれば見えない光で破壊することが可能

なのだ。

「ちい、ただの弾丸は効かねえ野かよ。だったらよ、これでどうだ!!」

「Roaring pierced」

哲馬が銃を振り回している間に陽菜は何かのOSを唱え始めた。

「はああ!!」

そして隣では港が叫びながら健に向かって大槍を振り回していた。健はその攻撃を相変わらずの集中能力で交わし続ける。だが、港の攻撃には隙が無く、健はなかなか反撃の瞬間を見抜けない。それぐらい港がこの武器を扱いがうまいのだ。

「ハッ!!」

なんとか一瞬の隙間を見て夕日は矢を放つが、やはりその巨大な槍で防がれてしまう。

「葉柱さん。どうですか?」

「まあ、いいじゃないの」

「そうですね」

健は夕日の隣に来てそう聴く。まるで、何かを待っている感じだ。

「とりあえずは、春皆さんたちががんばってくれと思います」

「ええ。とりあえずはそこから」

そして、ビルの中で一番その階で広い場所では電気と炎が対峙し

ていた。

「やはり、貴様はおかしい。貴族でもないものがこの俺に相手が出来るとはな」

「私にとつてはそんなこと関係ないわよ」

愛理のDUSの棒先はさらに電気の刃ででかくなる。対して俊吾のDUSの鞭も炎でどんどん燃えていく。

「まあいい。あの頃とは違うからな」

「そんなの、関係ないわ。ただ、私も違うから」

その会話の後、二人は同時に駆け出した。

「喰らいやがれ！！ハイバースト！！」

哲馬が放った巨大なビーム砲は陽菜に向かって放たれる。しかも陽菜のOSの唱えは完了していない。そう、哲馬はOSなしでこの攻撃を繰り出してきたのだ。驚きで陽菜は自分のOSの詠唱が途絶えてしまう。

だがその時、陽菜の前に栞がでてきた。まるで自分を盾にするよ。うな。もちろん、栞はそんなことは考えていない。

「させません。【円盤の盾】」

ディスク・シールド

そして栞の目の前には巨大な円盤が現れて哲馬の攻撃を防ぐ。しかもびくともしない状況だ。

「な、何だこれは！！」

「栞お姉ちゃん」

「陽菜ちゃん」

「あ、うん。〽Roaring pierced in a straight line」

「ちい!」

陽菜の詠唱が再開したのを確認した栞は盾の円盤を横にずらして方向を変える。そしてすぐさまその場を離れる。

「フラスト・キャンソ【直線に撃ち抜く咆哮】」

しして陽菜は強力な射撃砲を返しとごとく、哲馬に繰り出す。もちろん、哲馬は回避しようとして移動する瞬間、足元にいきなり矢が飛んできた。見れば夕日がにっこりと不適な笑みをこぼしていた。それを見て哲馬は愛想笑いをしてしまう。まあ、もちろん陽菜の攻撃はこれで避けることは出来なかった。

「う、嘘だろ」

そうつぶやいて哲馬は倒れた。同時にHPが0になった。

「春皆さん、陽菜ちゃん」

「五十嵐、さつさとあんたは会長の下へ!」

「そういうことか」

そう。最初から健たちは港と俊吾以外を倒す作戦でいたのだ。そしてその後、多人数での総攻撃。これがすべての狙いだった。しかも夕日を港と対峙させることで哲馬から夕日への警戒を無くすことである攻撃のときに夕日が進路をふさがせるものだった。

「どうやら、お前たちは健の頭で動いていたわけか。いや、所詮俺たちは健の掌の上だったわけか」

「まあ、五十嵐にとっては作戦がうまく出来たって感じでしょう。あの裏表無いタイプだからすぐに分かるわ」

「まあな」

そう言って二人は再び退治する。栞と陽菜は夕日のサポートでその場に残った。

「さあ、決着ね」

「まあ、すべては会長たちだな」

すべての作戦は実行し、後は実力行使のみとなった。

時間は少し戻り、校庭の回りにある観客席で杏はみんなの戦いをじつと見ていた。隣では杏の友であり、一組の学級委員長の小原明菜も一緒に試合を見ていた。

「あれ？杏さん」

その時、杏は聞き覚えの声に呼ばれて振り向く。そしてそこには健の弟の閃とその友達がいた。初等部も、いや、この学園の全校生徒が入るほど、この観覧席は広い。校庭を囲んでいるだけではなく、階は五階にもおぶ広さを誇っている。ちなみにイメージはサッカーのワールドカップみたいなドーム球場と似ている。

「お、閃。だれだこの美人」

「俺というか、俺の兄貴の幼馴染」

「あ、閃くんの友達？私は五条坂杏。よろしくね。閃くんも健ちゃんんの試合見に来たの？」

杏は自己紹介をした後、すぐに話題を切り替える。杏にしては珍しいことだ。

「まあ、こんな大きな試合で見に来ないやつのほうがおかしいだろ」

「生徒会が一つなくなるかも知れないからね」

「ただな閃、俺はお前からお前の兄貴はDランクと聞いたのだが」

その時、後ろから広は閃に聞いてくる。

「あ、そうか。閃くんは健ちゃんのDUSを見るのは初めてか」
「まあ、だがなんだあのDUSは一体」
「噂は当たっていたか、初の鎧のDUSと、初等部からのマスターの噂は」

徹は画面を見ながら言った。初等部からのマスターとは陽菜のことだろう。

「てか兄貴。さつきから逃げてばかりじゃねえか。あの大槍の人とちよつと戦ったぐらいで」

「その分、あの俺たちと同じ学年の子は結構がんばっているなあ」

「お前の兄貴、実はものすごく弱い」

「ううん。健ちゃんは絶対になんか考えている」

杏の言葉をきいて閃はちよつと息を吐く。

「まあ、そうだろうな」

「健さん」

閃たちの後ろから春海が両手を握って応援していた。

健はすぐに愛理の元に向かって走っていた。だがその時、健はあ
ることを考えていた。それはなぜ自分は普段は見えない人ばかり
なのに戦闘になると、このデジタルフィールドに入ると別にそんな
ことは無くなるということだ。

(今はそう考えている暇は無いですね)

今はとりあえず愛理のところに向かう。それが今健の目的である。

「はあー!!」

後ろに下がり、夕日は港に向かって矢を放つ。六本ぐらいの矢が一斉に放たれるが、港は巨大な槍で体を防ぐ。だがその途中、陽菜はOSを唱え始める。もちろんすぐに港は気づく。

「そうはさせるか」

さっきの戦闘を見て、陽菜の攻撃は非常に強力なものだと分かった港は即座に陽菜に向かって攻撃を開始する。小学生を攻撃するのに胸は痛むが、これは勝負。戦場に年齢など関係ないのだ。

「させません」

その時、栞が港と陽菜の間に入ってきた。もちろん、港の攻撃は止まない。さっきの攻撃を見たため、この行動も予想できている。

「だが、今はあのOSを止める!!」

その時、港の巨大な槍の後ろの先端が取れ、その中から針が付いた四本の縄が陽菜を襲う。もちろん栞はその攻撃も防ごうとする。そのため、一箇所ではなく、全範囲の攻撃に針を操作する。

「それでも、通させません【光の球体】」
ライト・ボール

その時、陽菜と栞の回りに光り輝いた壁が全範囲を防いだ。この技は、あの時、瓦礫を防いだときの技である。

「やはりか!?!」

だがその瞬間、港は陽菜たちに向かって駆け出してくる。そしてその後ろの加速器みたいなところからいきなり火が噴出してまるでジェットのような勢いで向かってくる。

「このDUSの名を忘れたか!?!」

港のDUSの名は、ウォールクラッシュ・ランス【壁を貫く槍】。その名のとおり、壁を貫く槍である。

「はあああああ!?!」

港の勢いのある一撃は一瞬で朧の光の壁を貫く。そしてそのままその攻撃は陽菜に向かっていく。

「きゃあ!?!」

「陽菜ちゃん!?!」

攻撃は陽菜の腹に直撃し、そのまま貫通してしまう。電磁のため、命に別状はない。だが、その光景は醜いものである。

「一人、討ち取つたり」

陽菜のHPは0になり、港はそのまま陽菜を槍から抜く。陽菜は戦闘不能となった。

「陽菜ちゃん」

「大丈夫だ。シヨックで寝ているだけだ」

「あんた本当に容赦ないな」

夕日はそういいながらさっきまでの時間を使ってしっかり矢をチャージしていた。港は夕日の声を聴いて振り向く。

「なるほど、あの子は囷か？」

「残念ながら違うわよ。囷なんてかわいそうだわ」

「わ、私たちが勝手に言っただけです」

「なるほど、あの子もそのぐらいの心意気はあったわけか」

そう言っただけで港は槍を構える。そして後ろの先のジェットから火が出てくる。さっきの会話でこちらも力を溜めていたみたいだ。

「じゃあ、彗。こっちも勝手に実行させてもらっわよ」

「は、はい」

「俺に勝てるんでも」

「私の氷、なめないほうがいいわよ」

その時、その場の誰もかが時間が止まったように感じた。そして一瞬のうちに港は駆け出し、夕日は矢から手を離れた。

港は早いと言うよりもすごい破壊力で夕日に突っ込み、夕日の手元から離れた矢はまるで吹雪のように港を襲う。そして、その二つの攻撃が重なりあった。瞬間、大きな爆発が起きた。

「やるな、お前」

「だから、言っただわよ」

その頃、愛理は次々に俊吾の鞭を避け続ける。逆に俊吾も愛理の攻撃を次々にかわしてく。もう何回この動きを繰り返したのか、誰もわからなかった。

「しかし、男女の戦いでは体力の差があることをお忘れかな」
「そうね。だから、私一人じゃ何も出来そうにも無いわね」

確かに、このまま同じ行動をすれば女子の愛理が先に体力が切れ
てしまう可能性がある。まさかと思うが、俊吾はそのことを考えて
戦っていたと考えるもいいのだろうか。

「でも、男の子が一人増えただけでどう変わるかしら」
「男子、まさか」

愛理の言葉を聴いて急いで俊吾は振り向く。だがそこにはすでに
左腕を構えている健が俊吾に向かって駆け出していた。

「【最後の爪】」
エンド・エッジ

そして一番の破壊力がある技を俊吾に向かって放った。

「ちい、まさかお仲間がここに来るとはな」

「いくら強いといえ、大将を、仲間を一人にさせるものですか。
実際、これはチーム戦です」

「まったくだな。お前か、さっきまでの作戦や動きの指示は」

「僕は指示はしてません。お願いしただけです。僕はそんな立場
の人間ではありませんから」

「いいだろ、面白い。お前が相手してくれるのか」

健は俊吾のその言葉に合図するように自分の拳と拳をぶつけた。
やる気は十分だ。俊吾もそのことが分かったのは鼻で笑い出した。

「ハッ！いいだろう」

そう言って俊吾は一気に健に向かって駆け出した。対して健も俊吾に向かって駆け出した。俊吾はそれを見てすぐさま鞭を使って中距離攻撃を仕掛けた。

「お前の戦闘バトルスタイルの姿は拳か。ならば距離は短いほど通用する姿だが、距離がつけられなかったら何も出来ない」

「まあ、そう来ますよね」

自分の武器が拳と爪で相手の武器が鞭とすればそうなるはずだろう。健ははじめからそうなるだろうと分かっていた。だから、あえてそうさせた。

「ほれほれ、これでは体力戦になるぞ」

「そうですね」

俊吾の今の言葉こそ、健の狙い。いや、体力戦というよりも持久戦が狙いである。健の狙いはそれは自分の集中力を上げること。それは健の特殊能力、完全集中を利用する形となるのだ。

「だが、残念ながら俺は体力戦は好きになれないからな。このまま決めてもらおう!!」

(まあ、そう来ますね)

俊吾はそう言って鞭からさらに炎を纏わせた。

「燃えろ!!」

そして鞭を振っているときに地面に当たった後にも炎が残っている。まるで何かを描く見たいに。

「これは、コマンドですか」

コマンド。それは地面や壁にあるものを描く事によってそれ相当の術を発動するものである。トラップや、不意打ちとかに良く使うものだが、ほかに準備が攻撃中に出来ることで強力なものでもあるため、使う人は限られている。

「さあ、燃えろ！！」モンスターズ・ファイヤ【牛尾の炎角】！！」

コマンドが描き終わったのが、俊吾は大きく叫んだ。そして同時に健がいるところからいきなり巨大な炎の柱が二本現れた。健はそのまま炎の中に飲み込まれる。

「くっ」

「燃えろ！！」

「後ろ、空いているわよ」

その時。愛理が俊吾の後ろに立って背中に向かって思いっきり切り裂いた。

「なっ！？」

「私のこと、忘れていた？」

「貴様！！」

俊吾は愛理のことを忘れていたらしく、すぐに後ろを向いて鞭を振るう。愛理は後ろに下がりながら攻撃を避ける。

「会長」

炎の柱が消えてそのまま健は落ちていく。愛理の妨害のおかげで短時間になったため、健は何とかHPを残すことが出来た。

「ごめんね。もうちょつと早いほうが良かったんじゃない」

「もしものことがありますから、確実なほうがいいですよ」

そう言って健は立ち上がる。

「お前、最初からどつちも狙いだっただのか」

「え。あのまま長期戦もいいですし。短期戦だとしても何とか不意をつけることが可能ですからね」

「なるほど。だが、お前らが俺に負けたらその作戦は無意味だ」

「分かっています」

その会話の途中、愛理は健の隣に来て一緒に構える。

「愛理さん。作戦通りをお願いします」

「分かったわ」

そう小さい声で言い合った後、先に健が駆け出し始めた。もちろん俊吾は鞭で中距離攻撃を仕掛ける。だが、今は愛理もいる。

「どつちもいるわよ」

そう言って愛理は棒の先で作った電気球を思いっきり放った。

「そんな攻撃」

俊吾はその弾をはじいて破壊するが、その分の間を健に与えてはいけなかった。健はすぐに俊吾の懐へ入った。そして思いっきりあ

「ごを狙ってアッパーをお見舞いする。」

「そんな程度か!!」

だが、さすがタフなのでそんなに効かなかったらしく、すぐに反撃される形となってしまった。

「健くん!!」

その時、愛理は棒から薄い電気のロープで健の手首に巻かせて後ろに引つ張って無理やり回避させた。

「助かりました」

「あいつ、やっぱりタフね」

それもあるだろうか、やはり健の腕力ではそんなにダメージは与えられないらしい。健はやはりかと思いい、自分の拳を見る。

「健くん!!」

「はい」

俊吾はすぐに切り替えて鞭の中距離攻撃を再開してくる。健はさつきと同じ方法で避けながら間合いをつめていく。その間愛理は俊吾の後ろに回る。

「さつきと同じ手は喰らうか!」

そう言って俊吾はさらに鞭の火力を上げだした。そのせいでさらに鞭の速さは増していく。

「さあ、燃える！！」

そしてさらにコマンドを描いたのか、次々に炎の弾が浮いてくる。これで進路がふさがれてしまう。

「お前にはこれだ！！」

そして愛理には鞭を思いっきり縦に振って炎の波状攻撃を放った。愛理はそのまま向かう先の方向で避けた。

「如月さん。なにかあの弾を破壊できますか？僕では熱すぎて」「うん。分かったわ」

そして一旦合流した二人は短く手早く会話した後、交差するよう場所に場所を入れ替えて動き出した。次は健が俊吾の振り向いた方向に来て、愛理はさっき健がいた場所の弾の消去を始める。

「次はお前か！？」

「お手柔らかに」

そう言っただけは俊吾に向かって駆け出す。だが、相変わらずの鞭攻撃に避けることしかできない。

「ほらほら、どうした」

「如月さん！！」

「ほっりゃ！！」

その時、愛理が後ろで棒を地面について思いっきり電気を流し込んだ。

「これが本当のあり地獄!!」

地面を走る電気が次々に流れて行き、俊吾を狙う。

「クソ!!」

そう言って空中へ逃げようとするが、健がジャンプしてそれに対抗する。しかも健のほうが高いのでそのままかかと落として俊吾を突き落とす。

健のDUSは鎧型のもので誰よりも高い身体能力を上げることが可能なのだ。そのため、力は無理でもジャンプ力はすばやさは上がっている。

「くそっ!!やはりそのDUSか」

「まだまだよ」

地面に着地した瞬間、横にスライドするように愛理と場所を入れ替える。なるべく移動したほうが健の集中力が高まる。

「行くわよ」

愛理は細い電気の柱を三本を俊吾に向かって放つ。俊吾は炎で対抗するがこの電気は貫通性があるために弱い攻撃では破壊できない。そのため大きな炎で破壊する。だがその間に健と愛理の場所を入れ替えたため、俊吾の前には健が現れた。

「この野郎!!」

俊吾はすぐにそれを見て鞭を思いっきり振るう。だが、時間が経

った今、集中力が高まっている健にそんな大降りの攻撃は通用しない。

「こいつうー!!」

「次は、逃がしません【最後の爪】」
エンド・エッジ

健の左手の爪がでかくなり、思いっきり俊吾の腹にめがけて放った。だが、そのときだった。いきなり俊吾の服が燃えていった。そして体には炎が纏われていた。

「えっ」

「捕まえたぜ」

炎が腕に移った影響で健は一瞬の間を作ってしまう。その隙を狙って俊吾は健の腕をつかんでそのまま地面に叩きつける。

「これで終わりだ」

「まだです」

健は横に転がって何とか鞭攻撃を回避するそして立ち上がろうとしたとき、健はあることに気づく。地面にコマンドらしき、線が書かれている。

「まさか」

「そうだ、さっきの攻撃はその円にお前を近づけることだ。さあ、燃えろー!!」

その瞬間、健の足元から一気に炎の柱が発生し、健はその中に飲み込まれる。そしてついにHPが0になり、健のDUS、【黒服のブラックヘルム・アーマー】は消えてしまい、健はその場で倒れた。だが、気絶はしてはい

ない。

「なるほど、そのDUSのおかげで気絶は免れたか。まあ、もうお前は戦えない」

俊吾がそう言ったとき、健は少し口元が緩んだ。その時、いきなり俊吾はなにかにいきなり縄みたいのに巻かれてしまって動けなくなった。

「な、これはー!!」

「忘れたわけじゃないわよね。私が健くんの手首につけた電気縄を」

「な、まさかまだ解いていなかったのか」

「だから、今あなたは捕獲されているのではないのですか？」

そう。実は愛理があの時健を助けた縄を戦闘中、ずっとつながっていたままなのだ。今この状況を作るために。

「貴様、わざとやられたな」

「まあ、あなたを油断させるためです。あなたのコマンドは移動中に把握していましたので」

「自分が傷つくことを厭わなかったのか!!」

「僕ではあなたには勝てないですから」

そう。健はあの時、追い込まれたのではなく、自ら追い込まれたのだ。そのことで相手が油断することもあり、愛理のとどめの攻撃の充電も出来た。しかもこの状況なら愛理が健を利用して風に見えない。

「さあ、とどめよ。【雷帝双剣・」

愛理のDUS、【電撃ノ棒】サンダー・スティックが纏っている電気はさらに強くなり、両端から巨大な刃を作る。

「二刀打破」

まず、一回縦に俊吾の体を切り裂き、その後棒を回してXを描くようにまた切り裂いた。その瞬間、俊吾のHPは0となった。

「俺の……負けだ」

そして大将のHPが0になったことにより、試合は終了した。

『試合終了！！三対一で第二生徒会大将敗北により、勝者、第一生徒会！！』

その言葉により、校庭は大声援に響いた。

「大丈夫？健くん」

「ええ。お疲れさまです。如月会長」

「健くんもね」

愛理の差し出された手を取って健は立ち上がった。そして二人であの場所に向かう。

「あ、五十嵐君に如月先輩」

「あ、お疲れ様、二人とも」

そこにはその場で立っている栞と、倒れている夕日と港がいた。戦績を見るとどうやら二人の決着は着かなかったようだ。

「陽菜ちゃんは？」

「あ、あそこです」

健はそのまま壁に背にして寝ている陽菜を見つけてそのままお姫様抱っこで抱く。傷はもうなくなっている。

「陽菜ちゃんもお疲れ様」

その頃栞は気がつきかけの哲馬の近くにきた。

「だ、大丈夫ですか」

栞は哲馬の額に触りながらそう弱弱しく言った。哲馬はそれを見てすっかりと眼を醒めた。そして、まるで天使に胸を刺された感じがした。

「あ、ああ。大丈夫だ」

「よ、良かったです。では私いきますね」

「ああ」

一言声をかけてから栞は健たちのところへ戻った。その時、ずっと哲馬は栞を見つめていた。

あの後、ホールは消えてみんな傷が消えた状態が出てくる。栞はもつふらふらの状態で夕日に肩を貸してもらっている。

「春皆さん。大丈夫でした？」

「は、はい」

「ごめんね。私がいろいろ回復させちゃって」

この会話によると戦闘中、何回も栞は夕日の傷の回復を行っていたみたいだ。それに陽菜の傷を回復させてくれたみたいで体力がもう無いのだろう。だからあの時、立っているのがやっとの状態だったらしい。

「いいですよ。これが私がやれることですから」

「本当にごめんね。で、あんたは一体どうやってあっちの会長倒したの？あんたのHPが切れた状態でどうやって」

「まあ、簡単に言えば。僕が困役をしたということです」

まあ、あの作戦は簡単に言えば困作戦だ。今見れば愛理は健が来た後、まったくダメージを受けていない。

「ありがとうね。健くん。お礼に私を下の名で呼ぶことを許可しましょう」

「如月先輩？」

いきなりどうしたのですかと言う顔を見て愛理は今の言葉の意味をまったく分かっていない健の頬をいきなり両手で挟んだ。

「だ、か、ら。これから愛理と呼んでって言うてるの」

「あ、愛理先輩」

「うん。よろしい。素直な子は好きよ私は」

「そうですね」

そんな健の言葉を聴いて愛理は笑顔になって前のほうに向きなおす。どうやら彼女の頬が少し桜色になっていることは健は気づいて

いないだろっ。

第三生徒会室。中では昨日の戦いを見ての感想の話だった。だがもちろん戦いに対しての感想は無く、完全に次はどうするかの話しになっていた。目的はもちろん、第一生徒会を潰すための。

「で、どうするのよ。あいつらが負けちゃって。って、やはり私たちがやるのね」

「会長。流行あの男子は危険かと」

会長の三千院美奈子の言葉を聴いて、役員である美穂は拳手して伝える。彼女は実際戦ったもの。いや、共闘したものであるため、健に何かの危険を感じたのだろうか。

「そうですね」

その時、副会長である伊吹奈央いぶきななはメガネを指であげながら美穂の言葉を返した。

「私にはその男子よりも、あの小学生のほうが危険だと思いますね。特にあの術」

「わたくしもそうおもいましたわ。だっていくらバカでもあの雑賀が一発で終わりですもの」

「私のときも、あの子の術で勝ったとか言っていましたわね」

美穂はあのとときの記憶をよみがえらせながら言った。確かにあのモンスターを最終的には陽菜の力のおかげで勝利に導いた。

「ではやはり、日高陽菜を警戒すること。分かりましたね」

その時、生徒会室に入ってきた一人の少女に美奈子は伝える。そしてその少女は健たちの知り合いだ。

「葉柱夕日さん」

とりあえずは一命つなげた第一生徒会は放課後に第一生徒会室に集まっていた。もちろん議題は第三生徒会のことである。

「やっぱり次に必ず第三生徒会は勝負を申し込んでくるわよね」
「あの時見た性格を見たら否定できませんね」

愛理はプリントをばらばらを眺めながらみんなに言う。だがこのとき、夕日の姿は無かった。

「でも、次ぎ戦うとしたら女子ですよね」
「ん？それがどうしたの？」

栞の言葉に愛理は聞き返す。だが、栞が言っている言葉はとても大切なことだった。

「お兄ちゃん、戦える？」
「……………」

陽菜の言葉に健は返さない。いや、返さない。まったくそのとおりだからだ。美穂戦のとき、実際健は攻撃しようとはしなかった。それなのに今回は第三生徒会。つまり女子のみと戦うことになる。

「なるほど。そういうことね」

栞と陽菜が言いたいことが分かった愛理はため息を漏らす。こうなればもう一人女子を生徒会に入れることが必要である。

「でも勧誘することになると難しいわよね」

「少し、考えさせてくれませんか？」

悩む愛理を見て健は拳手しながら言った。だが、はっきり言っただれに対してもまったく先が見えない状態である。

「まあ、勧誘は私たちに任せて。健くんはゆっくりどうするか考えてね」

「ありがとうございます。如月さん」

「愛理と呼んでって言ったじゃん」

お礼を言ったはずの健だが、違う言葉で逆に少し怒らせたみたいだ。その証拠に愛理は頬を脹らまして怒りを表現する。

「すみません。愛理さん」

「うん。よろしい」

だが素直に謝ると次にはにこやかな顔が待っていた。

次の日の朝。健と杏はいつもどおり登校してきた。そして夕日の姿を見て杏は元気良く挨拶をする。

「おはよう。夕日」

「ん。あ、おはよう杏」

夕日は席から立ち上がって杏のほうに向かう。少しボーしている様子だったが、すぐにいつもの表情に戻る。

「葉柱さん。昨日なんか用があったのですか？生徒会に来てませんでしたか」

「ん。ああ。まあね」

「そうですか」

短い言葉を交わした後、健は自分の席に戻る。だがその後、すぐに杏が健の席に向かってくる。

「ねえ健ちゃん。健ちゃんのお花屋さん。まだバイト募集してたっけ？」

「募集って、杏と母さんしか仕事してないので多分人手が足りてないと思いますが」

健の家は花屋で名は五十嵐FLW。少し小さい花屋さんで従業員は健の母の寧々とバイトの杏のみで完全に人手不足の状態である。ちなみに売り上げはそこそこ。まあ、寧々が趣味でやっていることなのでそこは気にしない。

「ふうん。そうか。ありがとね」

そう言うってから杏はすぐに健の席から離れた。杏はそれだけ聞きたかったみたいだが、その言葉だけで誰かにバイトの子を紹介すると言っているのと同然だった。

(てか、何で杏がそんなことを知らないのですかね)

普通はバイトをしている杏のほうが詳しいはずだが。その時、携帯から振動おきてメールが来たことを知らせる。発信人はいつもの我らが学園長だ。

（昼休みですか）

健はこの時、何かを思っていた。一つあのいのししモンスターとの対決で、二つ目は第二生徒会の試合のこと。この二つの戦いに健はなんか自分の弱わさが目立ったものだと思える。どのみち、自分は何も出来ていない。もしも一人だったら、すべてが終わっている。そう確信していた。

（やはり聞くべきですよね）

そう思いながら健はメールを女子高生並に早く打って送信する。相変わらず器用な人である。

昼休み。いつもの三人で学園長の共に訪れた。今日もテーブルの上にはお菓子とお茶が用意されている。

「それで、今日のお話はなんですか？」

「逆よ。健坊、あんたが私に聞きたいことがあるんじゃないか？」

学園長の智子はまるで健の考えを見過ごしたように言ってきた。もちろんそれは当たりなのだが、それよりもそれだけで菜と陽菜を連れてきた意味が無い。

「それで、今日のお話はなんですか？」

「ま、まったく同じ顔で同じ質問をしてこないでよ」

健は巢の顔で同じ質問をする。そのおかげで智子がなにが言いたいのかが少し分かった。

「第一生徒会のことですか？」

「まあね、しかし良く最後の一人が集まったものね」

「葉柱さんのことですか。彼女には感謝してます」

健はそう言うが、智子はなんか引つかかる顔をしている。その顔に健はなんか嫌な予感がしてきた。

「まさか、登録が出来ていないのですか？」

「そうなのよ。彼女まだ第三生徒会を抜けていないのよ」

「そうですか」

「でも、それって夕日さんがまだ済ましていないだけじゃないのですか？」

さすがに先生には敬語で話す陽菜の言葉に、栞を入れて全員首を横に振る。その後、栞は陽菜の近くに来て伝える。

「戦いの前に二日あったわけですから、その間に登録できますよね」

「葉柱さんの性格的に忘れたは無いと思いますが」

「まあ、それはあなたたちに任せるわ。次はあなたの番よ。健坊」

智子に言われて健はなんかごまかされた気分になってため息を一回吐くが、その後、すぐに自分が言いたかったことを口に出した。

「智子さん。僕に、戦い方を教えてください」

「戦い方？私に」

意外な質問に智子は驚いた。今までの健は自分で戦うといったことが無い。ましてや教えてほしいと言うことは強くなりたいということであって、そんな言葉、彼から一番縁遠かった言葉をその本人から真面目に言われて驚きと反面、意外さもある。

「僕は弱いです。今までの戦いでみんなに助けてもらってばかりです。自分では何の解決になっていないことは気づいています」

「それで、戦い方をね。それは無理な相談ね」

「え」

だが、智子はあつさり健の願いを断った。もちろん彼女にも叶えたい気持ちはあるが、それはしょうがないことである。

「私は拳系のことなんてぜんぜん分からないわ。それに、健坊の腕力じゃあ、そんな戦い方出来ると思う」

「そ、そうですね」

健は自分の力の無さを自分でも分かっている。だからこそ、戦い方を逆に知りたかったのだ。

「どうしても強くなりたいなら、自分で探しなさいよ。無いものを受け入れて、自分にあるものを最大に利用する戦い方を。調べるのは得意なはずよ。健坊」

「智子さん。ありがとうございます」

健はそういわれて目が覚めたように頭を下げた。自分で自分の戦い方を作る。それが健に今示された課題である。

「では、僕は少し図書室にでも行ってきますね」

「で、では私も」

「栞ちゃんと陽菜ちゃんは少し残ってくれるかしら」

健がそう言っつて学園長室から出ようとしたとき、同時に栞も立ち上がって着いていこうとするが、陽菜ごと、智子に止められる。ちなみに、陽菜はまたお菓子に夢中で、話しについていけない状態である。健はそのまま頭を下げて部屋から出て行った。クキユウは陽菜がおいしそうに食べているお菓子をずっと見ていたが、健が扉に向うと同時に飛んで健の頭の上に乗った。

「栞ちゃんたちにはまだ聞いていないことがあったのよ」

「は、はあ」

呼び止められて改めて栞は席に座る。なんか深刻な雰囲気になり、陽菜もお菓子を食べるのを一旦止める。

「二人はどうしてそのDUSを持っているのかしら」

「こ、これですか」

そう言っつて栞は右前髪についているいまやは形が棒状から丸に変わった髪留めを手取る。確かにいままで栞はなぜそれを持っていることになにも聞いていなかった。

「私はその、小さい頃からお父さんがくれたものです。小四ぐらいですが」

「ふうん、ちなみに今はそのお父さんはなにしているの？」

「他界しています。病気で。すみませんが病状はさすがに」

「いいのよ。そこまでは詮索しないわ。でもこれは聞かせて、あ

あなたの父親の名前は」

栞は残念そうに言葉を続ける。智子もそこまでして聴くことも無いことだと分かっている。肝心なのは病状ではなく、その父親の名前である。

「は、はい。春皆当^{はるみなとう}之と言います」

「当之ね。ありがとね。次は陽菜ちゃんだけど」

智子は紙にさらさらと何かを書いた後、陽菜に視線を向けた。それに気づいた陽菜は再開していたお菓子を食べるのを止めて聞いたことが分かっているのですぐに答える。

「私も、栞お姉ちゃんと同じでお父さんにもらったような気がする」

「陽菜ちゃんの場合、親だと素性がね。まあ、でもこれだとなんか共通点がありそうね」

「どついついことですか？」

孤児である陽菜には親のことはこれ以上知らないだろう、むしろこのことを覚えているほうが奇跡と言えるのだろう。そして智子のつぶやきに栞はついつい聞き返してしまう。

「実わね。健坊も父親に持たされたらしいの。まあ、実際、最初はリストバンドみたいな形のガントレットじゃなくなって十字架の模様があるお守りだったらしいの」

健は片面しか見ていないので気づかなかつたらしいが、あのお守りには十字架の模様がついていた。智子がそれを知っているのは、前に健がそれを持ってこつちに来たことがあるからだ。まあ、それ

は少し前の話しになるが。だが、これで共通点がそれぞれの父親と
言うのが分かる。

「偶然ですかね。お互いの違う父親にそれぞれ渡されたって」

「そうね。なんかその父親同士の中に何か秘密がありそうだけ
ね」

だが、これ以上は何も聞き出せないだろう。彼女たちもこの発動
には驚いているのだろうから。

「でも私、五十嵐君のお父さんが第三エンペラータワーの電子操
作委員の人だとは思いませんでした」

「まあ、あいつは昔から電子操作の達人だったからねえ。それが
今はデジペットなんかも作っちゃうなんてな」

さすがに智子もここまで炎の科学力がここまで行くとは思いまし
なかった。だが、この時、ついついあいつなら出来そうだなと考え
てしまう。

(まあ、もう作っているわけだけど)

そう思っている途中、予鈴のチャイムが鳴り響いた。

「では、私たちはこれで」

「ええ。またね」

扉を開けて頭を下げる栞と陽菜に智子は手を振って答える。扉が
閉じて、二人の軽い足音が聞こえなくなったとき、一枚のプリント
を手にとって見る。

「ただどね、これは思いもしなかったわね」

智子が眺めているプリントにはこう書いてあった。『携帯型、デジタルフィールド、クキユウ』っと。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9935y/>

Shadow,Light

2012年1月13日00時48分発行